

文 展 十 年



D04458662Z



Duke University Libraries





■ 美術叢書

■ 第五編

文展十年

青木小四郎著

美 術 叢 書 刊 行 會 贊 助 員

(い ろ は 順)

伊 東 忠 太
大 村 西 崖
川 合 玉 堂
田 島 志 一
高 桑 駒 吉
中 川 忠 順
黒 田 清 輝
寺 崎 廣 業
木 村 武 山
下 村 觀 山

岩 村 透
和 田 萬 吉
横 山 大 觀
高 村 光 雲
中 村 不 折
上 田 萬 年
正 木 直 彦
笹 川 臨 風
三 上 參 次

例言

□本書は官設展覽會の代表的作品圖録と審査員名及び優秀なる作品の目錄とを兼ねたもので、美術愛好者の文展追憶に便せしむるものである。文展十年の説明は極めて大體に亙るもの、且つ出來うる限り理論を避けて、平明簡易なる解説を旨とし、圖録及び作品目錄を見るの參考に資したるものである。内容に即しての傾向推移に就ては、著者また説を有するが、他日謂ふべき機會があるであらう。

□寫眞は各部に亙つて出來うる限り代表的作品を選ぶ筈であつたが、寫眞として見てあまりに原物の面影を破るものは之を避けたので、稍不完全の譏を免れがたいが、出品目錄竝に解説と比較して見られたい。

□詳細なる文展年表を附する豫定が時のおくれたために出來ないのは遺

憾とする所であるが、再版に附する日に其の缺を補ひたいと思ふ。

□第十回展覽會の批評は招待日當日の僅か一回の觀覽によつて得た印象を記したに過ぎない。雨の日で光線の加減が悪く、聊か暗中摸索の恨がないでもなかつた。優賞品目錄がまだ發表前で載せ得ないのと、寫真版を多くすることの出来なかつたのは遺憾だがやむを得ない。之も版を再びするの日に、批評と共に改めたいと思ふ。

目次

序說	一
第一回明治四十年	七
第二回明治四十一年	一三
第三回明治四十二年	一五
第四回明治四十三年	二二
第五回明治四十四年	二六
第六回大正元年	三五
第七回大正二年	四三
第八回大正三年	五〇
第九回大正四年	五七

第十回大正五年	………	卷
受賞者及審査員録	………	七三—二九

挿畫目次

第一回 明治四十年

片時雨

木間の秋

南風

森の奥

ゆくへ

第二回 明治四十一年

水墨山水

雪松

飼れたる猿と兎

宿鴉

第三回 明治四十二年

油斷

高嶺の雲

アレ夕立に

川合玉堂

下村觀山

和田三造

山本森之助

毛利教武

山岡米峯

山本春舉

竹内栖鳳

菊地芳文

尾竹國觀

川合玉堂

竹内栖鳳

一

宴の暇

落葉

溪四題の内雲の峯
雨の後

第四回 明治四十三年

棟木

女歌舞妓

少將伊衛

覽障

孔雀王

四季山水(其一部)

黒き猫

ひなた

讀書

女

墓守

第五回 明治四十四年

水(其一)

池田蕉園

菱田春草

寺崎廣業

尾竹國觀

縮木清方

高橋廣湖

下村觀山

木村武山

佐久間鐵園

菱田春草

岡田三郎助

山下新太郎

萩原守衛

朝倉文夫

尾竹竹坡

山路

轡

日照雨

浴場にて

小金井博士肖像

百日紅

病婦

幸ある朝

水郷

惠念

第六回 大正元年

積翠

近江八景の内唐崎粟津

寒月(其一)

夢殿

瀟湘八景の内(瀟湘夜雨)

極樂の井

横山大觀

結城素明

北野恒富

岡田三郎助

和田英作

黒田清輝

柳敬助

藤島武二

小杉未醒

米原雲海

高島北海

今村紫紅

木島櫻谷

安田勒彦

横山大觀

小林古徑

挿畫目次

瀟湘八景の内(洞庭夜雨)

若王寺瀧

獨逸の女

うすれ日

六月の日

無花果畑

第七回 大正二年

五月霽

遅日

寒林幽居

雜木山

鐵漿蜻蛉

驛路の春

滯船

初秋の朝

春さき

第八回 大正三年

寺崎 廣業

鹿子木 孟郎

石井 柏亭

坂本 繁二郎

南 薫造

辻 永

池上 秀畝

橋本 關雪

小室 翠雲

川合 玉堂

菊池 契月

木島 櫻谷

石井 柏亭

吉田 博

南 薫造

墨田川舟遊

舞したく

高山清秋

雨 後

最上川

砂丘の裏

なかれ

第九回 大正四年

木挽町の今昔

大原女

盛夏

初冬

浦島

夏

冬の小川

入江

イッ

挿畫目次

鏑木清方

上村松園

寺崎廣業

荒木十畝

中川八郎

滿谷國四郎

中澤弘光

池田輝方

土田夢僊

山内多門

山内多門

菊池契月

平井棊仙

三宅克巳

柿木久太

北村四海

五

第十回 大正五年

文姫辭胡

天空海濶

月

清麗

夕立

察山十得

素燒

池上秀畝

小室翠雲

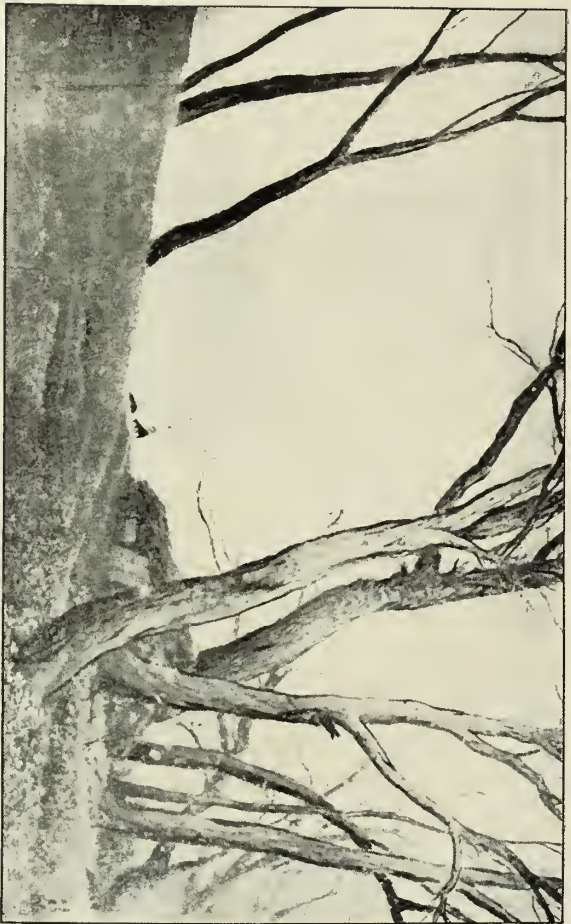
島崎柳塢

寺崎廣業

池田輝方

橋本關雪

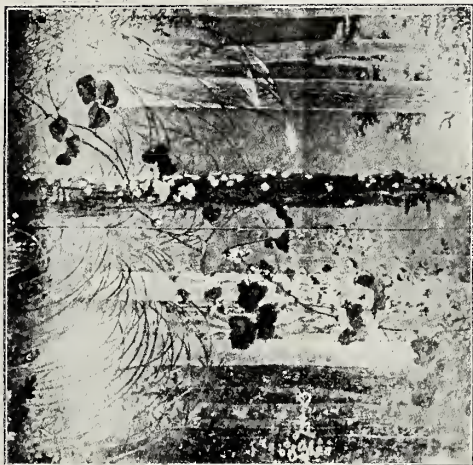
滿谷國四郎



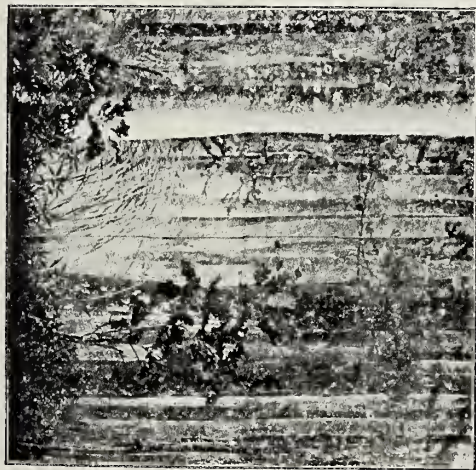
堂玉合川

(四一三)

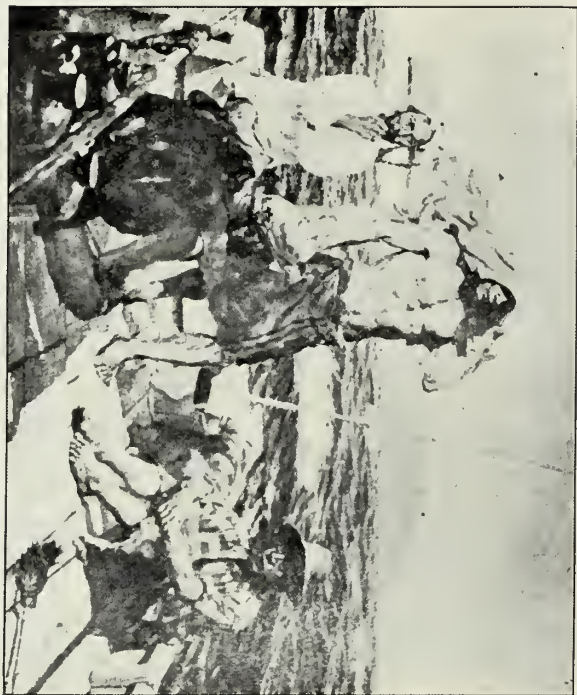
雨時片



山觀村下



(同一第) 秋の閑木



造三田和

(回一第)

風

南

森の奥 (第二回)



山本森之助



①

く

へ

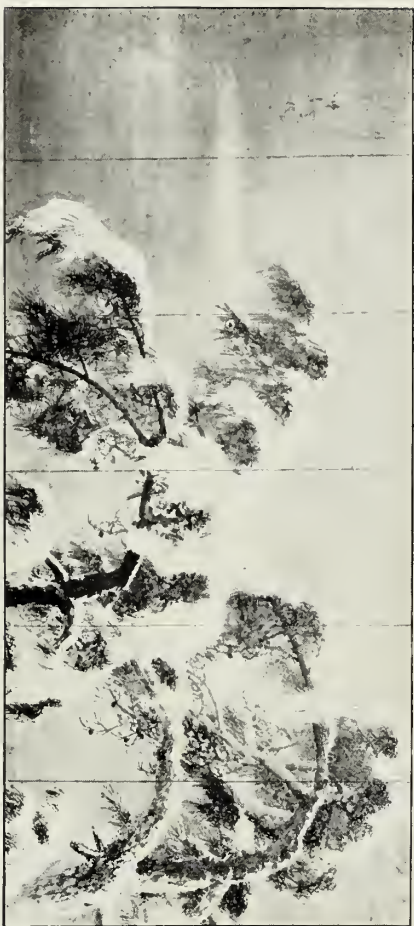
(第二回)

毛利敦武

水墨山水 (第三回)



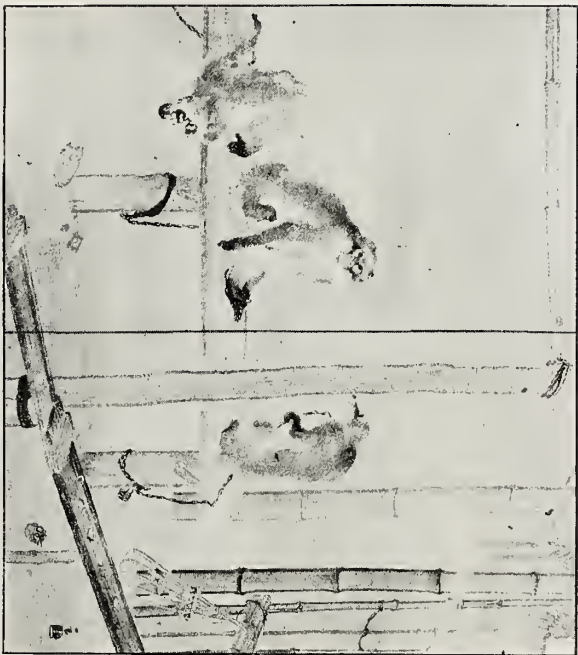
山岡米華



舉春木山

(回二第)

松雪



鳳栖内竹

(四三第)

兎と猿るたれば飼

文 芳 地 菊

(回二第)

鴉

宿





尾竹國觀

(第三回)

斷

油

堂玉合川

(第三圖) 高嶺の雲



ア
レ
夕
立
に

(第三回)



竹
内
栖
鳳

宴の暇 (第三回)



池田蕉園

草 春 田 菱



(四三第) 葉 落

(回三第)
後 雨 題 四 溪 峯 の 雲





坡竹竹尾

(回四第)

木

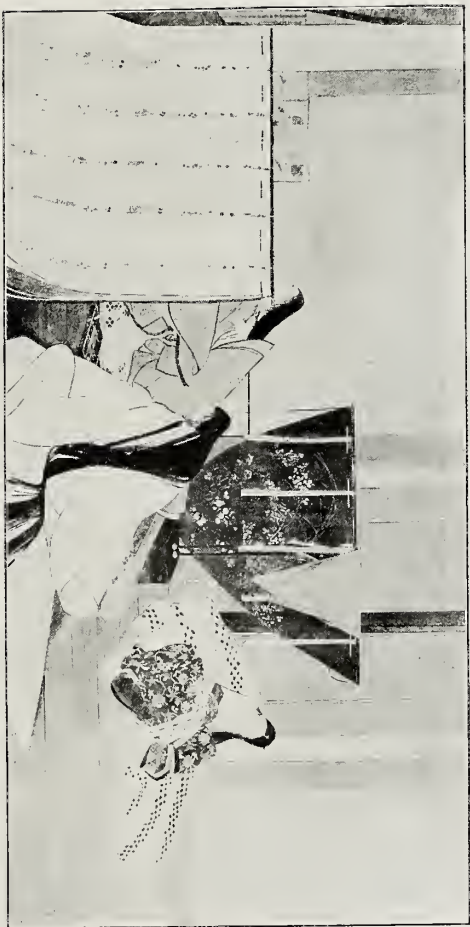
棟



方清木鋪

(同四第)

妓舞歌女



湖 廣 橋 高

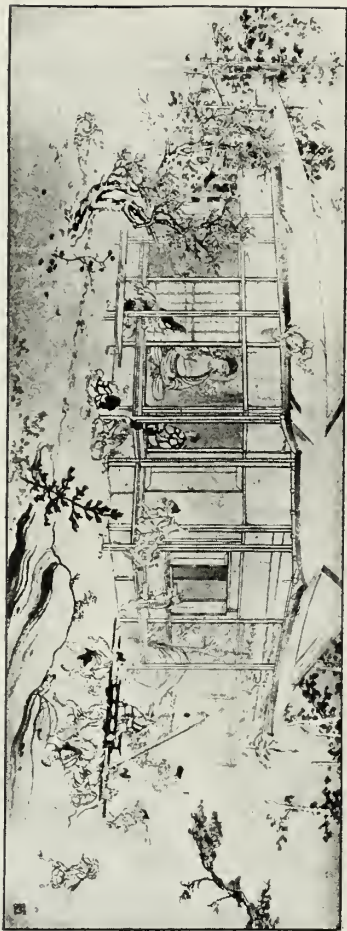
(四四第)

(一其) 衡 伊 將 少

山 觀 村 下

(回四第)

圖 障 窺



孔雀王
(第四回)



木村武山

四 李 山 水 (其一部) (第四回)



佐久間鐵園

黒
き
猫
(第四回)



菱田春草

ひ
な
た
(第四回)



岡田三郎助



讀

書

(第四回)

山下新太郎

女

(第四回)

萩原守衛





墓

守

(第四回)

朝倉文夫



坡竹竹尾

(四五第)

(一其)

水

山

路

(第五回)



横
山
大
觀



日照雨

(第五回)

北野恒富



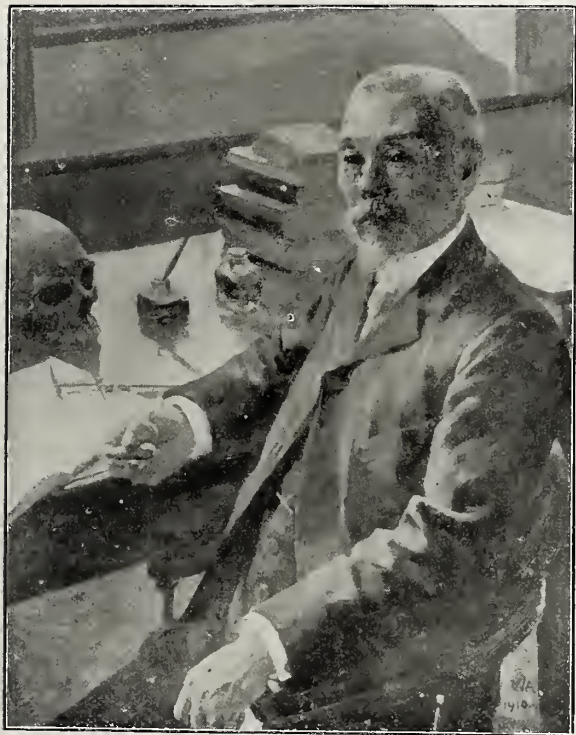
浴場にて
(第五回)



岡田三郎助

小金井博士の肖像

(第五回)



和田英作





助敬柳

(四五第)

婦

病

幸
あ
る
朝
(第五回)



藤
嶋
武
二

水

郷

(第五回)



小杉未醒

專

念

(第五回)



米原雲海

海北鳴高

(回六第)

翠

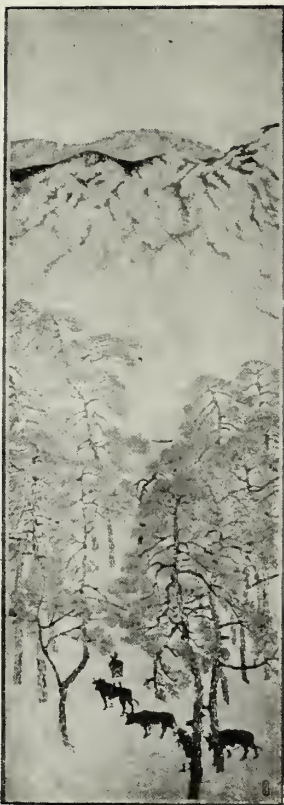
積



津 粟



崎 唐



近江八景の内
(第六回)

今村紫紅



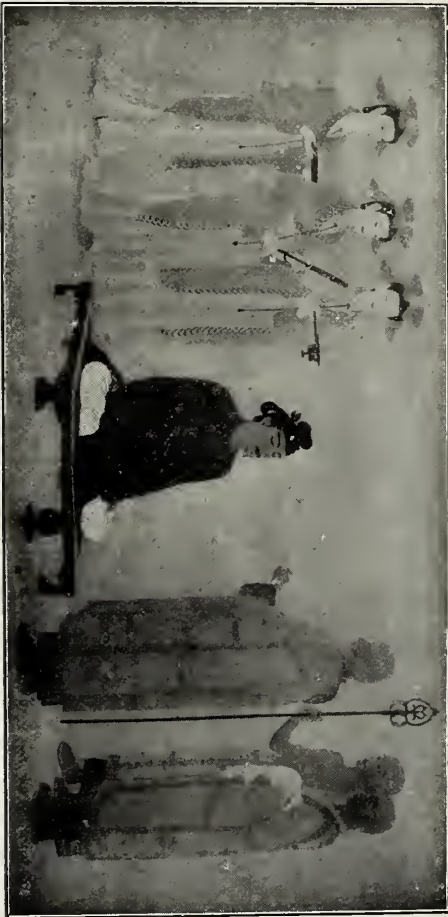
谷 櫻 嶋 木

(回六第)

(一其)

月

寒



安田 鞞彦

(第四幕)

殿

夢

瀟湘八景の内 瀟湘夜雨

(第五回)

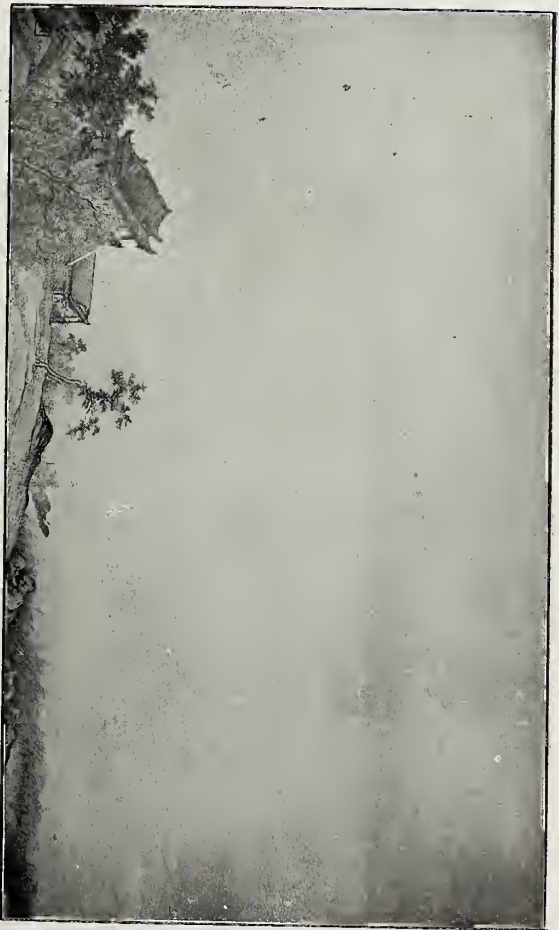


横山大観

極樂の井
(第六回)



小林古徑



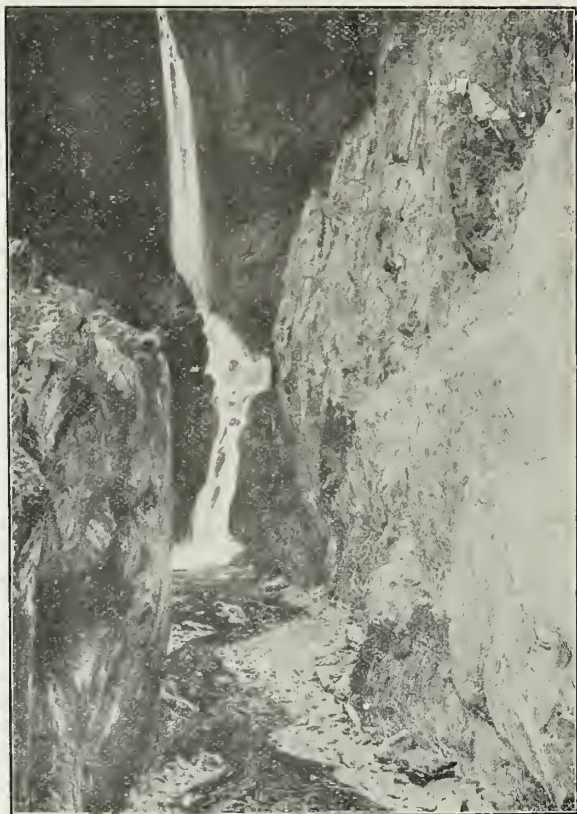
業廣崎寺

(同六第)

月秋庭洞内の景八湘瀟

若王子瀧

(第六回)

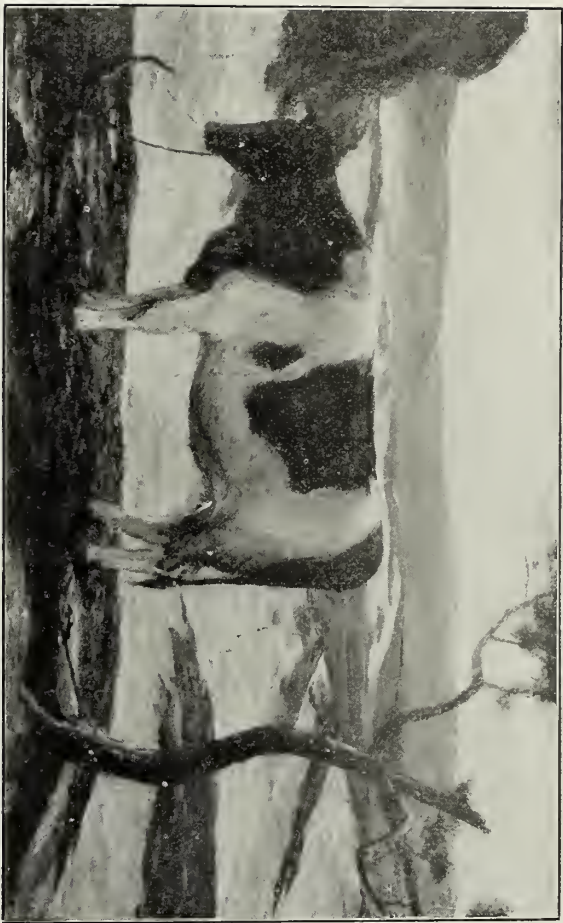


鹿子木孟郎

獨逸の女
(第六回)

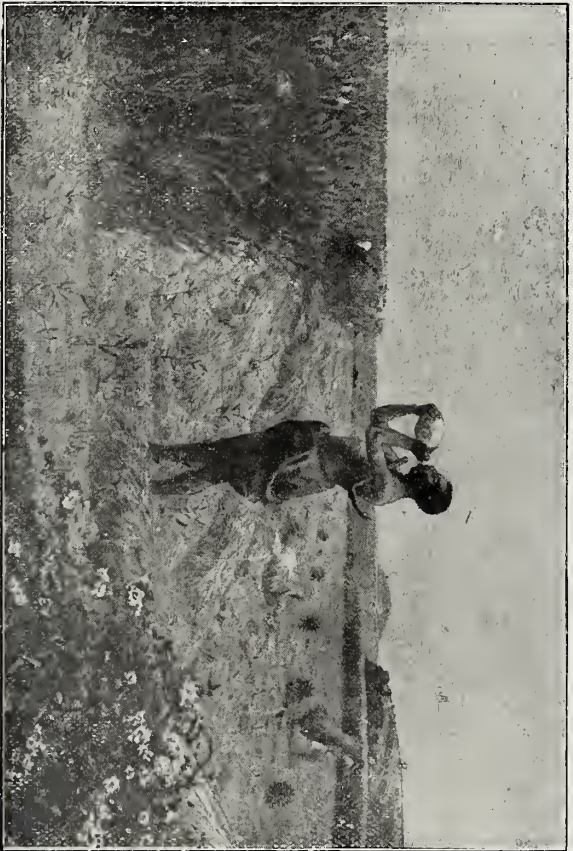


石井権亭



坂本繁二郎

(第六回) うれすう



南 薰 造

六 月 六 日 (あつち)



永 辻

(同六第)

無 花 果 畑

畝 秀 上 池

(四七第)

(二其)

齋

月

五





雪 關 本 橋

(同七張)

日

連

寒林幽居 (第七回)



寒林幽居
第七回
畫
卷
之
一
第
七
回

小室翠雲

雜木山
(第七回)

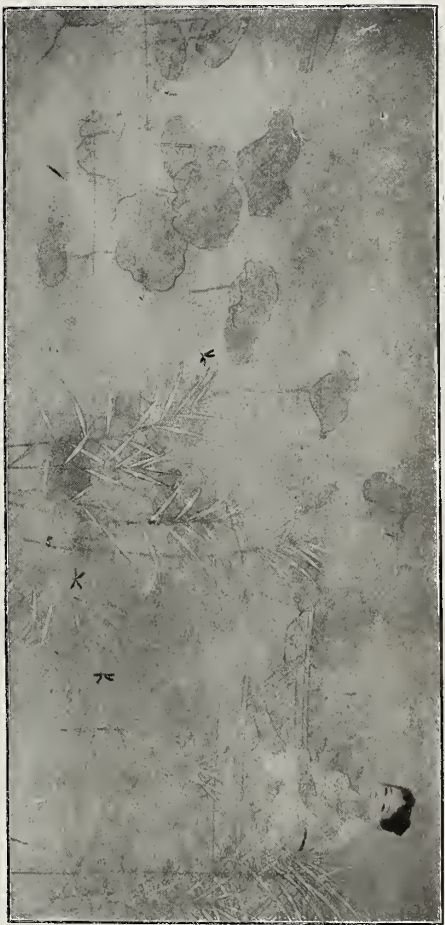


川合玉堂

月 契 池 菊

(同上類)

命 蜻 漿 總

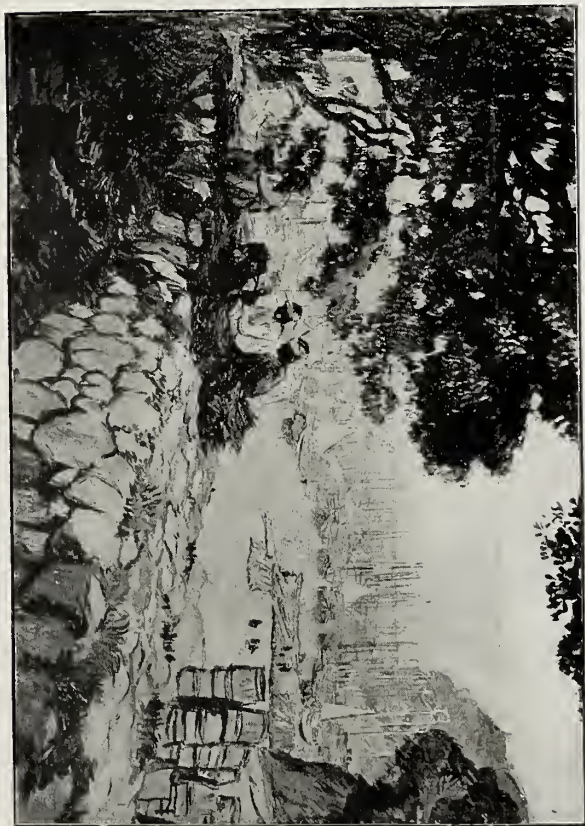


谷 横 崎 木

(四七番)

春 の 路 驛





石井柏亭

(第七回)

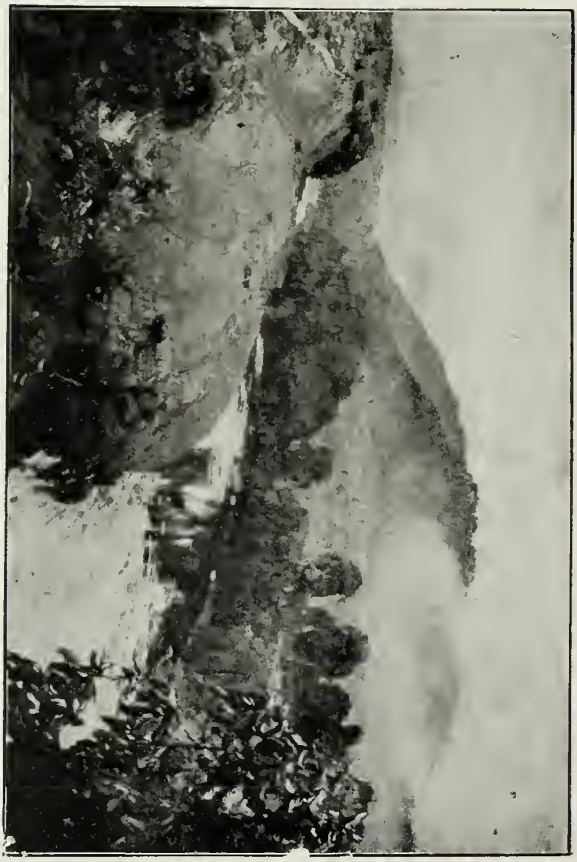
船

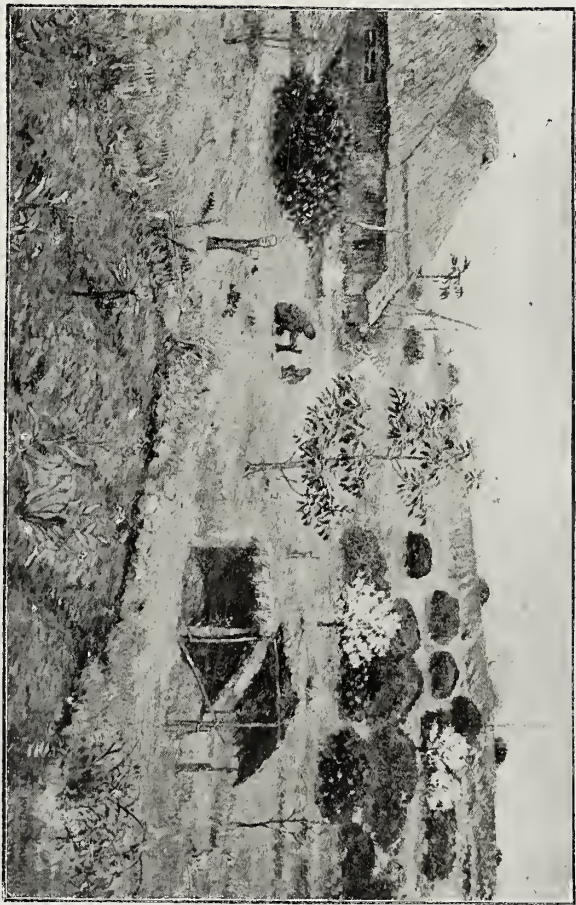
遊

博 田 吉

(四七第)

朝 の 秋 初







方清木 鐘

(川ノ遊)

遊船川田壘



園松村上

(四人舞)

くたき舞

梨廣崎寺

(同六景)

秋清山高



雨

後

(第八回)



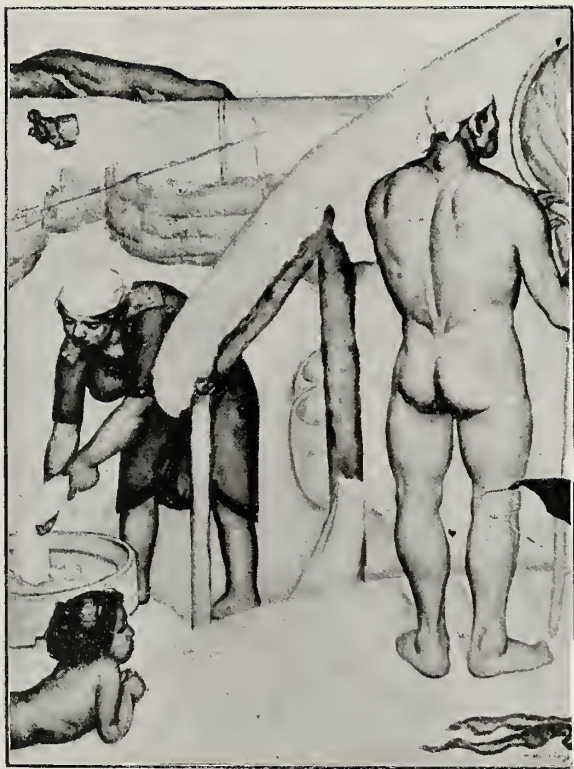
菴木十畝

最上川
(第八回)



中川八郎

砂丘の裏
(第八回)

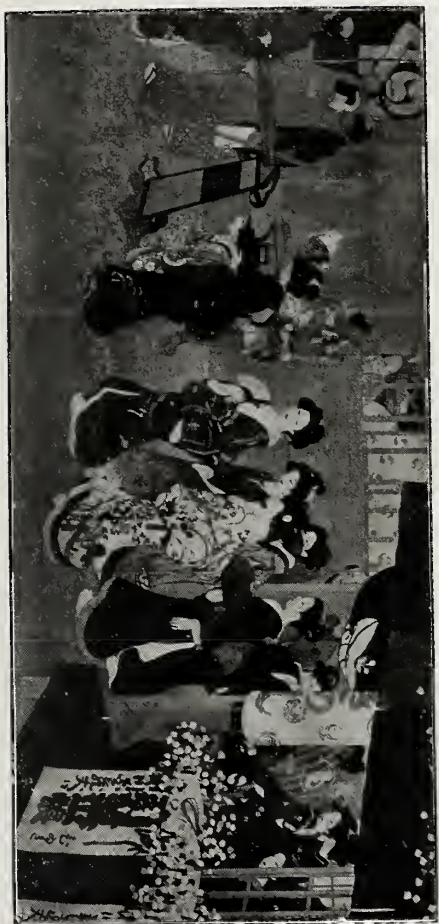


満谷國四郎



光弘澤中

(四八四) ねがな



池田輝方

(明治)

木挽町の今昔



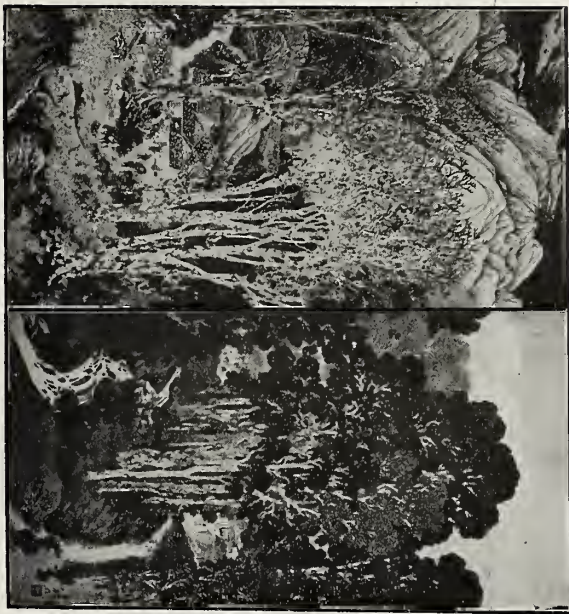
土田麥偃

(第九回)

大原女

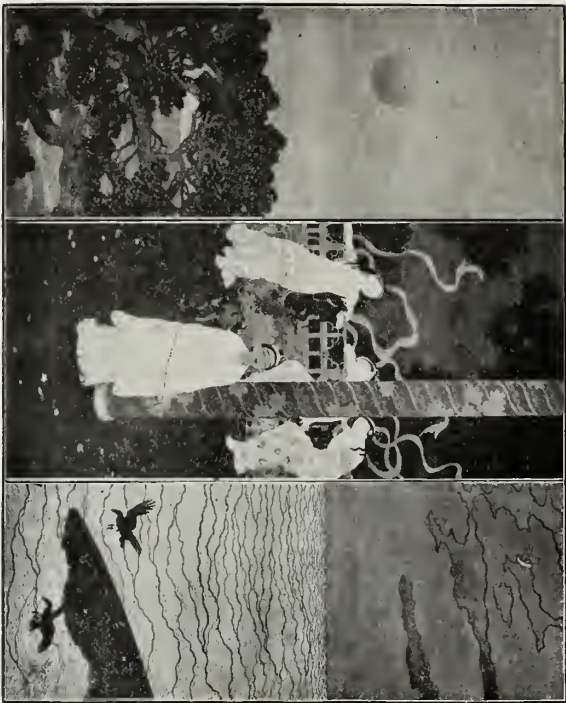
冬 初

夏 盛



門 多 內 山

(同九第)

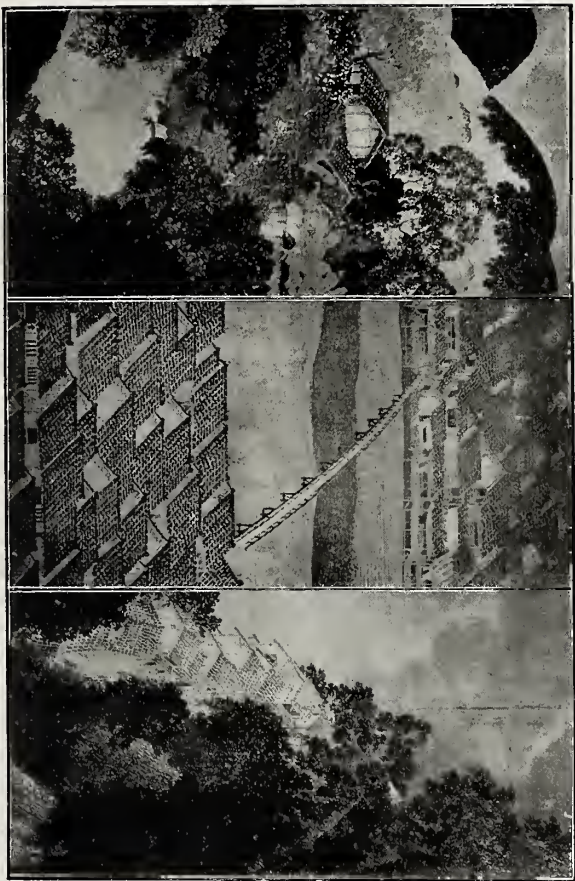


月 契 池 菊

(同九第)

鳴 浦

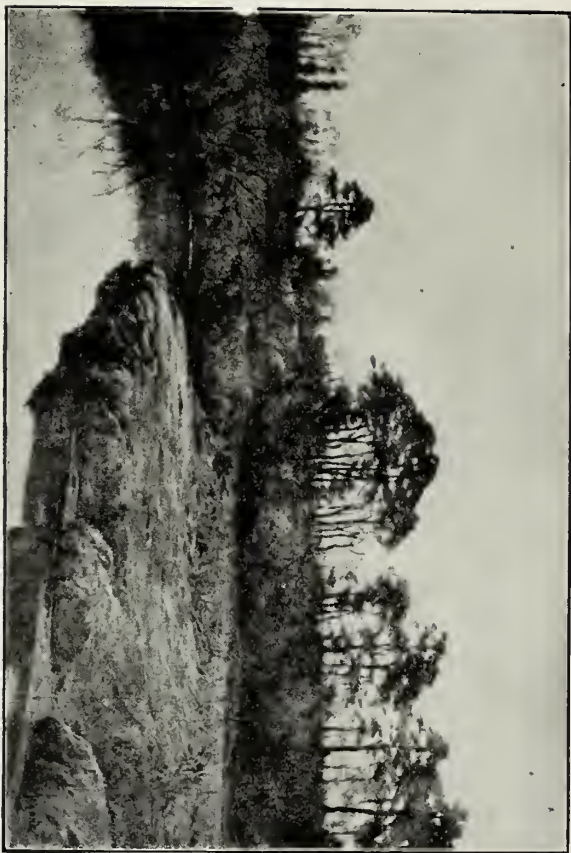
日 夕 畫 眞 驟 雨



仙 棧 井 平

(四九第)

夏



三宅克巳

(四九號) 冬の小川



太 久 木 柵

(四九第)

江 入

イ

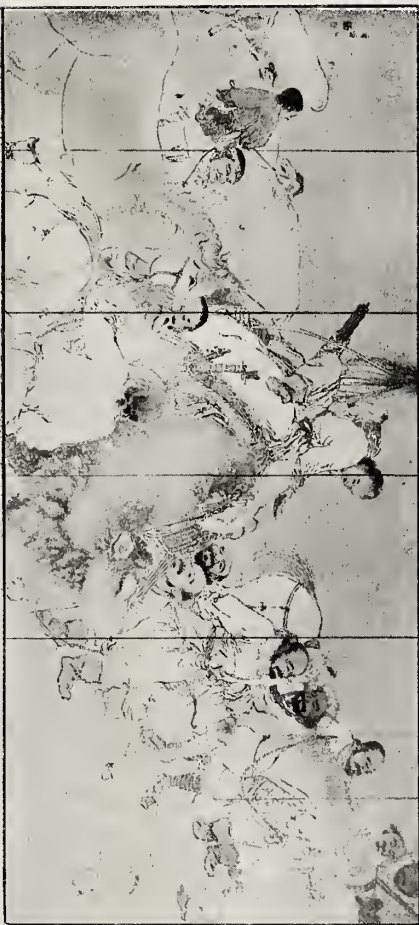
ウ

(第九回)



北村
四海

敵 秀 上 池



(四十一)

胡 辭 姬 文

畫
景
空
小

(四十第)

天
空
海
闊



角

(第十四)



鳴崎柳塙

清

麗

(第十四)



寺崎廣業

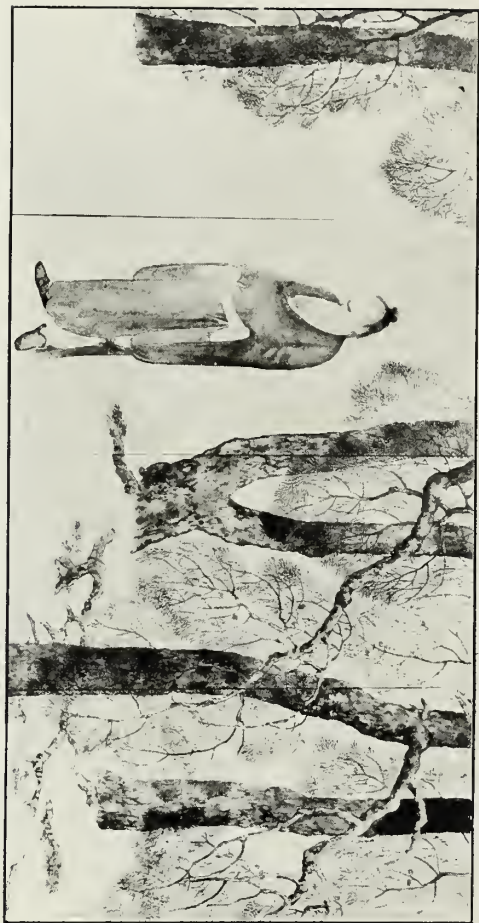


方輝田池

(回十第)

立

夕



雪關本橋

(四十第)

得拾山寒



耶四國谷滿

(回十第)

燒

素

文展十年

青木小四郎編

序説

時は移る。人は歩む。十年といふ歲月は開明史的に見ると決して長い期間ではないが、然し、その長からぬ時の間にも刻々に破壊と創造とが行はれてゐる。わが官設展覽會が創設されてから、是に十年になる。この時に際して既往十年間を追想するのも、あながちに無益のことではないであらう。

文展十年。その間の功過如何といふ問題を提供したら、恐らく十人十

色の答を得るであらうが、併し、何人にも、それが如何に下凡なものであるにもせよ、繪畫の趣味を普及させたと云ふことは否むことの出来ない事實であらう。嘗て佛蘭西から歸朝した洋畫家が、巴里では下宿屋の主婦すらサロンの批評を口にするといひ、顧みて日本國民の一般美術思想に及んで歎嗟の聲を漏したと云ふことを聞いたが、今日では東京の下宿屋の女中の大半が文展の噂をするに至つたではないか。文部省の設立の趣旨の主なる一つなる美術思想の普及と云ふ目的のある部分はずでに達せられてゐる。美術思想の普及と共に畫の價格の騰つたことも事實であらう。そしてある點では畫家の獎勵ともなつたであらう。京都の繪が次第に東京のそれに近づいて來たといふことも、大阪に新風俗繪の起らうとして居ることも、文展の結果として擧げてもいいであらう。

吾等は今文展十年の功過に就いて私議せんとするものではない。吾等

は唯文展十年に就いて簡單なる概説を試みれば足る。其の功過の如きは見る人によつて異なる。

一口に文展といふが、その中心となり、常に問題を提供するものは、日本畫の部である。日本畫の大體の傾向は如何。極めて大體に就いていへば、今の日本畫には三種の傾向を認めることが出来る。

第一は古格を守つて其の範疇以外に一步も出ないものである。古倭繪、南畫の系統を追ふものは何れもそれであるが、彼等は其の作物の新味なく内容なく却て俗悪で墮落的なることによつて、自ら其の存在の理由を否定してゐる。南畫の多くは墮落の傾向に屬するものであつて、決して醇雅なものではない。殊に東京には、文晁乃至華山の流風に倣ふものが多いが、大抵は拙劣にして見るに堪へぬもの、古人の上に一步を出でずして却つて古人より數十歩の退歩を示すものである。此の部類から吾々

は將來ある何物をも期待してゐないし、期待することも出来ない。

第二は古格を研究して、更に新味を汲み、或は西洋畫の筆意を摸し、從來日本畫中に見るを得なかつた意匠を加へて、研究的態度を持しつゝ、漸次に歩武を進むるものである。古畫の研究はその活用に於て初めて意義を持つ、洋畫の傳習もその採取に於て初めて意味がある。彼等が古畫を根柢としてそれに新意を加へて新日本畫を建設せんとする努力は嘉すべきであると共に、必ず將來あるものといふことが出来る。此の種類の中にも自ら急進的のものと漸進的のものとを見ることが出来るが、共に意義のある努力であり、研究である。其の作品には苦悶の迹がある。醇熟の域に達しないものがある。或はあまりに洋臭の多いものがある。併し、此れ即ち研究的過渡期の特色として、許さるべきであらう。此れを實例に就いて見れば、下村觀山の「木の間の秋」、寺崎廣業の「谿四題」、横

山大觀の「山路」「松並樹」「瀟湘八景」の諸作、菱田春草の「落葉」、尾竹竹坡の「棟木」、「水」、今村紫紅の「近江八景」等を初め、其の他之に屬するものは極めて多い。而して其の多くが技巧派ともいふべき京都の畫家から湧かなかつたことも、敢て奇とするに足らぬ。

第三には寫實に基いて裝飾的ならんとする新傾向のものである。之は比較的後に生れた傾向であるが、その難はあまりに純裝飾に近づいて圖案めき、自然の眞諦を忘却して、繪畫としての意味を忘れる點にある。

此等のものには、觀山の「木の間の秋」や春草の「落葉」の影響もあるであらうが、それは此等の追従者が、「落葉」や「木の間の秋」に裝飾畫としての外に多大の領域あることに氣がつかぬからである。此の部類のものも、よく導けば新傾向の見るべきものを生ずるかも知れない。

文展の日本畫の傾向は概別して、右の三種とすることが出来る。洋畫

には最近に到るまで、海を隔てた泰西の流行の一波一瀾の影響があまりに著しく、畫家の多くは常に適歸する所を知らない有様である。洋行がへりが常に文展に於て優賞を占むるが如きは寧ろ稱するに足らぬ。

彫刻の趣味は一般に理解されないのみならず、又日本畫や洋畫ほど問題となるまでに達してゐない様でもある。

今後の文展の行くべき道は如何。これは大なる問題であると共に、また容易に決定し得る問題でもない。吾等は今それに對する意見を陳べる要を見ない。今から去つて、年々の作品の主なるものに就いて、簡單な記述をして、讀者の思ひ出に便せしめよう。文展の内容を主としての推移史の如きを述べて見たいが、今は紙數の許さぬので、他日を期するこ
ととする。

第一回 明治四十年

第一回の展覽會はそれが初めてのものであるだけに、非常に世の視聽を集めた。畫家の方面に見ても著しく努力の跡が見えた。愈々開會せらるゝに到つて毀譽褒貶の聲の豫期以上に甚しかつたのを見ても、その盛況の度が覗はれる。

日本畫中で最も注目すべき作は蓋し、下村觀山の「木の間の秋」であらう。これは秋の林間を描いたもので、草木の紅葉に色彩の美をつくし、精をあつめ、稍四條派を汲み、光琳を探り、裝飾的傾向に走りつゝ、而も單なる裝飾に陥らずして、寫實に基く自然の眞諦を有する所に其の價値が認められる。推して以て文展第一年の傑作とするに足る作品であつた。觀山の「木の間の秋」は必ずしも、新意を追ふにのみ腐心した作ではな

い。而も、どこかに歩まうとする努力が見える。東京と京都との畫風を比較して、極めて大體に就いて謂へば、東京の畫家は漸く内面的傾向を帶び、京都の畫家は舊に依りて安住せる技巧派たるの觀がある。而して今回の傑作たる竹内栖鳳の「雨霽」の如きも、柳を描き五位鷺を描いて筆致の輕妙と熟達の三昧境に入つたる技巧派の代表作と見ることが出来る。觀山の畫は東京畫壇のために、栖鳳の作は京都畫壇のために、各々氣を吐いたものといふべきである。

寺崎廣業は壯大なる「大佛開眼」を描いて世を驚したが、大作ではあつても、まだ彼の傑作としては推しがたいものであつた。横山大觀の「二百十日」と「曙色」とは依然として朦朧體の作物であつて、又優れたものであつたが、川合玉堂の「片時雨」は其の穩健な畫風を餘蘊なく示したもので、亦佳作として推すべきであらう。山元春舉の「海月」は壯大な圖樣

を有するものではあるが、やはり技巧のかつたものであつた。審査員中には以上の數氏以外の問題とすべきものはない。

審査員外の作品としては、木島櫻谷の「しぐれ」が群鹿を描いて其の腕を見せたが、その傳彩は京都畫家一流の不愉快なるものであつた。菱田春草の「賢首菩薩」及び安田靫彦の「豊公」は共に個性の表現に努力してゐる作者の苦心の見るべきものがあつた。野田九浦の「辻説法」は其の多數の人物の布置に努力を見る。之に似たものには、町田曲江の「悲報に接したる佛敎の歩み」がある。特に表情を描いて稍々成功に近いものであつた。木村武山は廣業の「大佛開眼」に似て、「阿房劫火」を描いたが壯麗といふ意外に多く謂ふべきものを見ない。

美人畫としては、上村松園の「長夜」、島崎柳塢の「西鶴のおなつ」及び榊原蕉園の「もの詣で」などがある。比較的傑出したものとしては松園の

「長夜」を擧ぐべきであらう。

山本梅莊の「秋景山水」は南畫のやゝ見るに足るべきものである。審査員中松本楓湖、小堀鞆音の如きは十年一日の如く武者繪の如きを描く。それかあらぬか、文展には、愚にもつかぬ武者繪風俗畫が多い。

西洋畫中審査員の作では、黒田清輝の「白芙蓉」は清楚高雅、岡田三郎助の「肖像」は妥當溫雅で共に佳作ではあるが、特に傑出したものではない。中村不折は「白頭翁」及び「彫刻師」を出して漸く其の趣味のクラシカルにならうとする傾を示す。満谷國四郎の「購夢」は大作ではあるが、すべての點に於いて研究の餘地を留めた作品である。其の他の審査員には之といふべき程のものも見えなかつた。

和田三造の名は其の傑作「南風」によつて世の視聽を惹いた。「南風」は海上を疾走する漁船の一端に或は坐し、或は立つてる二三の漁夫を描

いたもので。勁健な筆と確實なデッサンとは、多少の缺點を補つてあまりあるものであつた。

山本森之助の「森の奥」はそのそつのない技巧を示したもの。中澤弘光の「夏」、中川八郎の「夏の光」及び吉田博の「新月」の如きはいづれも相當の出來ばえであつた。

橋本邦助の「ともしび」や跡見泰の「夕の岬」も亦記しておくべき作であらう。

彫刻の部は頗る寂寥たるものであつた。數に於て他の部に劣るのみか質に於ても決して優れたものではない。新海竹太郎の「露營の夢」はその平生得意とする所の題材を用ひたもので、稍見るべきもの。米原雲海の木彫の「神來」も相應の作であつた。毛利教武の「ゆくへ」は「神來」に比して遙にその價值の少ないものであつた。

第二回 明治四十一年

第二回に至つて從來見なかつた舊畫の審査員が俄に五名の數を増したことは、世相の反映と見るべきことで、彼等が絶えなんとする古格を繼承してゐても、世俗のそれに對する信仰のまだ失せないことを示すものである。然し、第二回に於ける大事件は之よりも、文展と同時に國畫玉成會が開かれ、下村觀山、横山大觀を初め舊美術院派に屬する畫家の一切文展に出品しなかつたことである。そして、觀山の「大原御幸」の傑作は之を文展に見ることが出来なかつたし、又安田靉彦の「守屋大連」の如きものも見るを得なかつた。玉成會は一年にして止み、翌年は文展へ復歸したが、美術院派は歴史的に又畫法上に古くから官畫（と云ひ得べくんば）と相容れざるものがある。玉成會はそれを具體化したもので、こ

れやがて後年美術院展覧會の俑を成したるものと見ることが出来る。

玉成會のために振はなかつた文展では京都の畫家が振つてゐた。竹内栖鳳は「飼はれたる猿と兎」を出して、その手法の巧妙を以つて、動物を描き他に比類のない技倆を示した。山元春舉は「雪松圖」の大作を出した。是は彼の得意とする題材であつて、構圖にも難がなく、豪壯で雄勁で傑作となすべきものであつた。二等賞を得た菊地契月の「名士弔喪」は稍々見るべき作であるが、同じき木島櫻谷の「勝乎敗乎」は多數の人物を驅使した點に見るべきものゝある以外には傑れたものではなかつた。

寺崎廣業は「月」を出したが、さしたる作ではない。玉堂の「秋山遊鹿」は温健ではあるが、前年の「片時雨」に及ばぬこと夥しいものである。新審査員の作品に見るべきものゝ多からぬはいふまでもない。

南畫としては小室翠雲の「青山白雲」稍見るべきもの、田中頼璋の「鳴

瀧「小坂芝田の「深遠」もかなりのものではあるが、共に氣韻の不足といふ點に於いて難があるであらう。

川北霞峯の「竹徑春淺」は稍佳作といふべく、都路華香の「諸神歡呼」は尙研究の餘地を止めた作であらう。

上村松園の「月かげ」、島崎柳塢の「おないどし」榊原蕉園の「やよひ」などは大した作ではなかつた。

西洋畫では黒田清輝の「樹かげ」ややおもしろしく、満谷國四郎の「車夫の家」は構圖の下凡なること驚くべきものがある。岡田三郎助の「萩」は和田英作の「おうな」と共に無難な作として推すべきものであらう。

和田三造は「煒燼」の大作を出して、愈々其の手腕の健實なることを想はしめた。吉田博の「雨後の夕」はまた佳作であつて、雨後の氣分がある程度まで巧に表現されてゐた。中川八郎の「北國の冬」、山本森之助の「曲

浦」、中澤弘光の「雄鹿半島の一角」などは風景畫として、かなり好評を博したものであつた。フランク・ベレスフォードの「中條君の肖像」、石橋和訓の「ものおもひ」は共にアカデミックな畫風を持つたものであつた。

橋本邦助の「水のほとり」はやゝ見るに足るもの、水彩畫では三宅克巳の「湯ヶ島」にすぐれた技巧と溫雅な自然の見方とがあつた。

彫刻の部では、朝倉文夫の「闇」が場中での佳作であつた。荻原守衛の「文覺」もおもしろいものであつた。北村四海は「春秋」に於いて大理石の使用の巧妙を示した。山崎朝雲の「大葉子」と米原雲海の「寒山子」とには、老練の鑿の跡が覗はれた。新海竹太郎氏の作も目についた。

第三回 明治四十二年

第二回の寧ろ甚だしく寂寥であつたのに引きかへて、四十二年の秋は

かなり、にぎやかであつた。

寺崎廣業は一二回ともに、さして振はなかつたが、「溪四題」を出すに及んで、新日本畫の先驅をなす傑作を示し、文展史上に不朽の名を留めた。彼はこの作をなすに、自然の寫實と古格の傳習とを以てし、極めて大膽なる試をして而もその間に大なる不調和もなく、嘗て日本畫に見たことのない新味を出して風景畫の新様式を創めた。彼の採取する所は極めて廣く、舊日本畫に更に南畫の意匠を加へ更に古土佐の様式をまじへ、それに從來見ない筆法をも加へてゐる。此の畫は第五回の大觀の「山路」と共に、一のエポックを作つたものであつた。此等の畫を或は半熟といひ、あるひは西洋臭味の多いのと難ずる徒があるかも知れぬが、それは過渡期の作としてゆるさるべきもの、而も此の作の如きは妥當の出來である。竹内栖鳳はかつて鷺を描き猿と兔とを描いて技巧の爛熟に氣を吐

き、今また「あれ夕立に」の作を出して、手法の大膽と色彩の妙を盡し、技巧の點に於ては企及者なきことを示してゐる。この繪には生動の態あると共に、品位もある。栖鳳の名を重からしめる程のものではないが佳作といふべきであらう。横山大觀は「流燈」を描いてその得意の手腕を振ひ、色彩の豊麗と表情の巧妙とを以て、一種獨自の境を開いてゐる。山元春舉の「鹽原の奥」は横卷で變化に乏しいが水の描寫はさすがである。川合玉堂の「高根の霧」は彼一流の作であるが、色彩を主とし規模の小なる恨がある。

審査員外の作品としては、菱田春草の「落葉」を以て白眉とする。此は驚くべき精緻な筆を以て林中の落葉を描き、而も光琳あたりを模し裝飾的傾向を持ち、加ふるに毫も自然の眞諦を忘れなかつた點に於て最も見るべきものがある。自然を裝飾的に取扱つたものに一回の觀山の「木の

間の秋」がある。此二者は共に、此の傾向中の傑作として逸することの出来ぬものであらう。

尾竹國觀の「油斷」は中心のない點に於て色彩の照應のない點に於て難はないでもないが、併し、多數の人物を配してさしたる破綻を示さず、やゝ統一もあり、色彩もあまりに下凡ならぬのを取るべきである。國觀の弟竹坡は「茸狩」を出して輕妙なる雅趣を示した。木島櫻谷の「和樂」及び菊池契月の「悪者の童」は共に劣作で人物の形相がわるい。其の傳彩の俗惡で褐色じみたのは更にわるい。審査員菊池芳文の「織月」にも同じやうなる色彩の上の難がある。

榊原蕉園は「宴の暇」に、鏑木清方は「鏡」に於て共に艶麗な作風を示したが、あまりに佳い出来ではなかつた。

小室翠雲の「雪中山水」田中頼璋の「霞む春晴る、秋」共に可もなく不可

もなく、田邊竹邨の「細雨空濛」の方が寧ろ醇雅であつた。平福百穂の「アイヌ」は單調な空氣を破る磊落な作であつた。

西洋畫。

審査員の多くが肖像畫を描へたのはむしろ奇妙な現象といふべきである。黒田清輝の「寺尾理學博士」、和田英作の「原法學博士」と「角田市區改正局長」、岡田三郎助の「大隈伯夫人」の類はいづれもそれで、而もいづれも相當な出來であつた。滿谷國四郎の「かぐや姫」は力のはいつた作ではあるが、彼に劇的構圖の完きものを求むることは、求むるもの誤であらう。

中澤弘光の「おもひ出」は大作である。そして浪漫的理想のものを描いて、これまでの効果を得らるれば、まづ成功にちかいものといふべきであらう。たゞし佛體に尊嚴の氣のないのは残念である。鹿子木孟郎の

作では、淺間山中の小品が見るべきもの、黒田清輝は肖像以外に「鐵砲百合」を描いて、自然の特殊性を重じ、直截に得た印象をそのままに表現してゐる。

吉田博の「千古の雪」は構圖はいゝが、色にすこし窮屈な點がある。山本森之助の「濁らぬ水」は佳作であらう。中川八郎の「瀬戸内海」、跡見泰の「砥石切」はまづ無難である。橋本邦助の「幕あひ」は裝飾的傾向を有する氏としては、得意な題材ではなかつた。

山脇信徳の「停車場の朝」は小品で人目につかぬやうなものではあるが、構圖が清新で、印象の鮮かな作であつた。渡邊ふみの「白がすり」と石井柏亭の「熊野河口」と、正宗得三郎の「白壁」などは今でも思ひ出せる作である。

彫刻の部では、朝倉文夫の「山から來た男」、萩原守衛の「北條虎吉肖像」の二者が共に注目を惹いた。此の二人者は彫刻界に於て最も將來あることを示した。惜しいかな、萩原守衛は早折した。

新海竹太郎の「原人」はその手法を見るべきものである。米原雲海の木彫「宇宙」も佳作といふべきであらう。

第四回 明治四十三年

文展なる語は年々弘通し、今や漸く新しき年中行事の主なるものとして見らるゝに到つた。それだけ對世間的ともなつたし、そのために此の會を創設した當事者の目的の一部分も達せられた譯である。併し、又、一方から見ると、その品位を重じ、鑑別を高くせんことを望み、徒に俗眼に投ぜむとするの陋を歎ずる者もあつた。そして此と相關聯し老朽に

して新趣味を理解し得ぬ老大家、或は黨派心乃至は地方的感情に動かされて、弊を他日に残さむとする先輩に對する非難の聲も起らずにはゐなかつた。何にしても、此等甲の是とする所、乙の非とする所、紛々たる世論の起るのは、畢竟、文展そのものの種々の意味に於ける發展の反響に他ならぬ。そして、公平に考察しても、文展は年々その量に於て進歩を示すのみか、質に於ても向上の迹を示してゐるのである。

第四回も決して寂寞とは謂ひ得ないのみか、日本畫の如きには頗る注目に値するものがある。洋畫稍々振はざるの感ないでもないが、然し、それが退歩を意味する者ではない。彫刻には、又可成り優秀のものを見た。

日本畫に於て最も見るべきものは、之を審査員側にしては、觀山の「魔障圖」であり、廣業の「夏の一日」であり、大觀の「楚水の卷」であり、春舉の「寂寥」であり、春草の「黒い猫」である。是を審査員外にして

は、竹坡の「棟木」があり、契月の「供燈」があり、清方の「女歌舞伎」があり、櫻谷の「かりくら」がある。其の他玉堂の「炊煙」蕉園の「秋のしらべ」冬のみどる「翠雲の「山海圖」の如きも敘述の筆を省き得ぬ作品であらう。

觀山の「魔障圖」は、その鳥獸戲卷と百鬼夜行とから得來つた一種の意匠と、その奇警にして而も漫畫的傾向をもつ筆致と、更にこの種の圖様に最も適合してゐる白描法を用ゐて、優に渾然たる一作をなして居る。屋中に靜坐せる一僧と怪佛、屋根に跳梁跋扈する多くの魔物には、一々變化と活動の趣があつて、一見鬼氣の人に迫るものがある。觀山は常に舊手法をその理解方に應じて運用し、他の多くの畫家が未成品を作る前に必ず一個の完成味をもたらず。彼の長所はこの點に存する。

支那の風景を取材として、而も勝れた作品は廣業の「夏の日」と大觀の「楚水の卷」とで有らう。共に支那的情調を表してゐるが、獨創的

なる點は大觀が勝り、諸法を綜合して而も新方面に進まむとする點は廣業が勝つてゐる。

春舉の「寂寥」はその構圖の稍々窮したるあとがないでもないが、さすがにその手腕の見るべきものがある。玉堂の「炊煙」は彼にしては、寧ろ普通作にすべきもので、作家の主觀のあまりに稀薄なるを惜しむ。春草は裝飾的にして而も印象的なる方面に赴かんとするやうである。その「黒き猫」は必ずしも、大作とはいひ得ぬものであるが、その印象的なる點に、漸く彼獨自の疆地が見られぬでもない。

竹坡は「棟木」及び「おとづれ」の二作を出し、共にその手腕の凡ならぬことを示してゐる。前者はその構圖の大膽と用筆の自在と漫畫的趣味との渾和したる點に看るべきものがあり、後者は色彩の諧調に觀者の心持をそそつた。

「供燈」はむしろ平凡の作で、その構圖は却つて高橋廣湖の「少將伊衡」に劣るもの、内容の淺薄にして、色の調子も勝れたものではない。櫻谷の「からくり」も、重厚の趣がなく、一見太だ不快を催さしめるものであつた。

風俗畫として清方の「女歌舞伎」及び蕉園の作はかなり傑れたものである。前者は多數の人物を使つて、而も賑かな色彩を見せたところに努力の跡が見える。たゞ色の生々しさと、どこことなく落ち付きのないのは缺點である。「秋のしらべ冬のみどる」は構圖が散漫で、優しきみはあるが全體に空氣の薄弱な難がある。

川端玉章その他の老大家の健在は悦ぶに足る。併も唯悦ぶに足るといふに留る。南畫系統の作にも、あまり佳作はない。翠雲の「山海圖」は生硬で、秀畝の「初冬」は不純である。寧ろ田邊竹邨の「秋山曉靄」などに

は、平明な情趣を見出し得る。高島北海の作には常に韻致の缺けてゐるのが弊である。その「蜀道七盤關」は寧ろ愚作といふべきであらう。

日本畫を去つて西洋畫を見ると、全體に平靜な氣持が満ちてゐるやうである。邦畫は多趣多様であつたが、洋畫にはどことなく一種のおちついた所が見える。それだけ、活氣がないと謂へば、さういへないでもない。

黒田清輝は自然に對して常にデリケートなる感覺を失はぬ。そしてそれが圓熟せるその筆技と相俟つて、他の企及し難い高雅なる作物を致す。この點に於て「荒苑斜陽」は場中の傑作たるを失はぬ。中村不折の趣味は年を逐うてクラシカルな偏した傾向を持つ。而もそれが色彩の不純と品位の缺乏とによつてそこに一種の不快なる調子を持つ。「半諾迦尊者」は僅にそのデッサンの優秀なる點を見るに留る。満谷國四郎は腕の所有者ではあつても、頭の所持者ではない。その「一階」の庸劣なる趣味を見る者

はこの言を疑ひ得ぬであらう。さすがに和田英作には幾何かの才分がある。その肖像は傑作といふべきである。「まともものあかり」よりも、その「薔薇」こそ却つて取るべきものであらう。岡田三郎助の「くもり日」ひなた「山本森之助の「島」と「いはや」鹿子木孟郎の「紀州勝浦」中澤弘光の「まひる」はいづれも大して不可のないかはりに、又大した傑作でもない。新歸朝者たる山下新太郎の「靴の女」及び「讀書の後」には描法にも色調にも輕快な清新な空氣が漲つてゐる。同じき柳敬助の「夫人」もわらくはないが、同じき南薫造の「座せる女」には、溢れるばかりの藝術味が落ちついて而も上品に表はされてゐる。佳作といふべきであらう。

吉田博の諸作、中川八郎の「巖壁」、青山熊治の「九十九里」の類には、作そのものを通して作者を現はすよりも、畫面そのものから、單にその手腕のみを示すものしか持たない。小杉未醒の「杣」は漸くその裝飾的傾

向に専らなるもの、九里四郎の「老人」中村彝の「海邊の村」田邊至の「窓邊」の肖像はいづれも妥當な解釋のついたものである。

要するに、洋畫では新歸朝者の作が最も注意すべきものであつた。そこにわが邦畫に對する哀しいアイロニーが含まれてゐる。

彫刻三十餘類の中、新海竹太郎の「獸」はとにかく場中を壓して立つものである。併し、全身に力の充實はあるが、それに伴ふ一種市氣のややおもしろからぬものがある。朝倉文夫の「墓守」には技巧のすぐれたる所があり、萩原守衛の「女」には一種の暗示的の情趣がある。此の人の死は彫刻界から一の光明を奪つたものといふべきである。

第五回 明治四十四年

文展は全體として年々の進歩を見せる。併し、特に傑出した製作の吾

等をして、恍惚たらしむる程のものはない。

日本畫は概して振はない。審査員中最も異色ある作をなしたるものは大觀の「山路」である。古土佐に南畫風の筆を加へ、飄忽たる中に朴純な而も大膽なる境地を啓いて行く點は大觀獨特の境地である。此の繪は古法を復活して新意を汲まむとする點に於て、更に又此の以後幾多の追從者を出して一の新機運を作らうとしてゐる點に於て、文展史に最も注目すべき作である。第三回の寺崎廣業の「谿四題」とこの「山路」とはかゝる意味に於て最も注目に値する。

大觀の作を外にして必ず説くべきものに、玉堂の「細雨」がある。清楚渾厚、最もその特色を發揮したものであつた。栖鳳に驚くべきはその技巧の練達の三昧に入つてゐることである。而も「雨」の如きはその技巧以外に栖鳳の名を重からしむるものではなかつた。栖鳳振はず、觀山は描かず、

廣業の「支那風景」は彼としては、寧ろ平凡の作で工夫の足りない恨がある。そしてそのいづこにも支那山水の特殊性の見えぬのは何故であらう。玉章翁の「雨後山水」は粗獷の氣はあるが珍しく生趣の溢る作であつた。

先蹤大家の作、斯の如く振はざるに、新進作家の作にも亦、多く推稱すべき作を見なかつた。木島櫻谷の「若葉の山」は漸く京都畫家の通弊たるセピア色を脱してはゐるが、どこかに不純の匂を持つた作である。竹坡には多々益々辨ずると云ふところが見える。「秋草」「梧桐」「水」の三點中、最後の「水」は最も興味が深い。その扇面古寫經あたりから得來つた畫法はこの題材に適してはゐるが、かゝる素描を屏風の大作に用ゐたのは、作の効果の上から見て損なやり方であつた。同じく素描を用ゐたものは吉川準の「菩提達磨」がある。併し、此は素描の妙味を脱して、徒に繁褥の嫌を有するものであつた。

山内多門の「日光山の四季」、及び「漁村」は雪舟あたりを倣つたものであるが、まだ渾化の域に達してゐない。結城素明の「囀」はその洋畫式裝飾傾向に新方面を開拓してゐる。清方の「驛路の女」は蕉園の「髮」に比して遙に傑れてゐた。

新浮世繪とも云ふべき風俗繪を出して大阪畫壇のために氣を吐いたものは北野恆富の「日照雨」であつた。傑作と云ふべき程のものではないが、その博彩の落ちついて、かなりの品位と情調とを有してゐるのは嘉すべきであらう。國觀の「人真似」はその彩色の混濁とその市氣の紛々たるのに頭痛を覚えしめる。看來れば、第五回に於ては、僅に二三の佳作を見た以外に、多く推稱すべきものがない。安住のあとが稍場中にあらはれ初めたやうである。併し、時は移る。人は動く。表面安逸なる氣の溢つてゐる中にも、新しき作家の漸くあらはれむとする傾向は看取せられる。

そしてそれらの中に、今村紫紅、前田青邨、平井楳仙、橋本關雪等の名を挙げたい。紫紅の「護花鈴」には莊重なる落付がある。楳仙の「赤土山」には着眼の新味がある。青邨の「竹取」には古繪卷を摸した古雅な味がある。何れも完成した作品ではないが、彼等が何物かを追求し、努力してゐるところが見える。

洋畫は寧ろ邦畫に比較して振つたと云ふことが出来る。

南薰造の名は「瓦焼き」によつて頓に重きを加へた。此は作者の藝術的氣稟が畫面の隅から隅まで行き渡つた作である。純日本風の材料を驅使して、そこに平和なしづかな藝術的天地を創造してゐる。

小杉未醒の「水郷」は彼が漸く自己の行くべき道を見出し得たかと思はれる作である。作物の根柢を流れるものは前の「瓦焼き」と同じものであるが、純裝飾的になつてゐると同時に、完成味のある作であつた。

山下新太郎の「窓際」、有島生馬の「宿屋の裏庭」、中村彝の「女」、坂本繁二郎の「海岸」、柳敬助の「病婦」、津田青楓の「五月のインクライン」、石井柏亭の「サンミユエル橋畔」、藤島武二の「幸ある朝」の如き諸作は何れも、その藝術味の豊かな點、印象の鮮かな點、或は、色彩の豐潤乃至は筆觸の清新な點に於いて、それ／＼傑れた作品であつた。

是等に比すると、二等賞といふ榮譽を贏ち得た、青山熊治の「金佛」も、赤松麟作の「午後三時」も大作と云ふ以外に、時間的勞力が多く表れてゐると云ふ以外に、何物をも吾々に與へ得ないものであつた。

審査員の中、黒田清輝の「百日紅」はその藝術味の豊かな點に於いて、自然の印象の極めて鮮かに表現せられた點に於いて、その描法の大膽なる點に於いて最も傑出したるものであつた。

滿谷國四郎の「港の雨」も佳作たるを失はぬ。彼の安價なドラマチカ

ルの構想はいつも、吾等をなやましめるが、自然を題材としたるものは此の弊がない。吉田博、中川八郎の諸作は満谷のそれに比すると、遙にその價値の劣るものである。中村不折は例の如く「跋陀羅尊者」を描いて、そのデッサンのみを誇らうとしてゐる。

和田英作の「小金井博士の肖像」は肖像畫としてはその解釋の妥當なると、技術の溫和なる點とで優れてゐる。岡田三郎助の「浴場にて」は佳作の部であらう。たゞし、左足と手の指とは甚だ拙劣なるものと云はねばならぬ。

鹿子木孟郎の「インスピレーション」は衆口一致、冷笑の中心となつた。その着想の下凡にして、その傳彩の俗悪なることによつて、作者の藝術的良心の存在を疑ふものは、二三に留らなかつた。

彫刻中の佳なるものは、朝倉文夫の「土人の顔」であらう。新海竹太

郎の「鐵槌」には力はあるが、いつものやうな匠氣のあるのがおもしろくない。「一致」の方がすぐれてゐる。木彫の中では、平櫛田仲の「維摩一黙」がやゝ見るに足るべきものであらう。

朝倉文夫の「産後の猫」は小作だが、一寸おもしろいものであつた。藤井浩祐、堀進二、石井鶴二、武石弘三郎の名も亦かなり注目に値するものであつた。

第六回 大正元年

審査といふ藝術家本來の性質とは全然關係のない問題、勢力といふ世間的の問題、情實と云ふいつの時にも免れがたい問題が、いかなる時にも頭を擡げて、平地に波瀾を起さうとする。そしてそれが終に當局を動して第六回に到つて日本畫は第一科第二科に區分せられた。もとより第一

科に屬する邦畫中の保守黨の自ら畫してなしたる所で、恐らく彼等にとつては頗る得意なことであつたらうが、併し、それは、彼等が自滅と嘲笑の運命をより多くしたるものに過ぎない。第一、彼等がその描くところを以つて、一の流派傳統を保存して持續せしめようとするの無意味なることはいふまでもない。次に彼等が考へて以つて、邦畫の多くが洋畫に煩せられて古格の忘られてゐると云ふことも、その考違であつて、彼等の古格は彼等以外の畫家によつて、活用せられ、よりよく有效に用ひられてゐるのである。

之れを第一科の先蹤大家の作に就いて見ても、益頭峻南の「玄雲匝地」、佐久間鐵園の「茂松清泉圖」、高島北海の「積翠」、山岡米華の「水墨夏景山水」、望月金鳳の「松上鳥鷺圖」の如き、そのどこに新味があり、そのいづこに古格を追従して古畫の域に到達し得たものがあらう。彼等

が推して二等賞を興へた小坂芝田の「秋爽」、津端道彦の「火牛」、さては池上秀畝の「梢の秋」、田中頼璋の「水郭の春」、松林桂月の「寒汀」、小室翠雲の「四時佳興」の如きに、果して何物を得るであらう。吾等は多くを語るの甚だ無意味なるを思ふ。

第一科に保守の大家を追ひ拂つた二科は、頗る活氣を呈してゐる。横山大觀及び寺崎廣業が各々「瀟湘八景」の大作を出して、龍虎相争ふの狀を示してゐるのは、蓋し壯觀と謂ふべきである。そして、此の二人者の特色が、各々その作物に最もよく現はれてゐることも面白いものであつた。

大觀の八景は徹頭徹尾大觀の八景である。彼は八景と云ふ古來の傳統的固習の感じから脱して、そこに彼独自の八景を創造しようとしてゐる。そこに彼の個性がいかによく出てゐる。大觀の作に比すると、廣業の八景はいかにも傳統的綜合的である。彼の勤勉は彼をしてあらゆる八景

の古畫を研めしめたらしく見える。そして、それ等のすべてを、彼の努力によつて打つて一丸として、そこに新しく描かれたのが廣業の八景である。二者ともに傑作たるを失はぬものながら、そこに此の二人者の特色が現はれ、且つ此の二者の示す傾向が又、今の日本畫の傾向を示唆するものではあるまいか。

大觀、廣業二家の外、審査員としては山元春舉の「嵐峽」、及び川合玉堂の「潮」がある。「嵐峽」はさすがに水の研究に傑れた點はあるが、たゞそれまでの作である。「潮」は玉堂の作としては、比較的大膽な作であるが、あまり佳作と云ふべきではなかつた。

木鳥櫻谷の「寒月」は毀譽紛々たる作であつた。併し、毫も寒月の趣がなく、動物の標本めき、一體に彩色の不純を責める人の方が多かつたやうであるが、松本博士の如きは、口を極めて之を賞揚した。夏目漱石氏が

往年の「若草山」と共に不愉快と云つたのは何人も首肯する所であらう。

今村紫紅の「近江八景圖」は大觀廣業の八景圖と共に種々の問題を提供したものであつた。その構圖の苦心、その描法に種々の試をした跡、材料に注意を拂つた點などいづれも推賞に値する。併し、此の繪は完成作ではない。苦悶の繪である。思ふに此の畫は紫紅の悶の象徴ではあるまいか。更に又、日本畫家の悶の示唆ではあるまいか。予は此の繪を以て、又文展十年史中、かかる意味で特筆すべきものと思ふ。

安田靉彦の「夢殿」も亦好評を博したものである。併し、此の繪にとるべきはその技巧の細緻巧麗を極めた點であつて、作者の靉つた夢殿そのものが、遺憾なく表現せられてゐるかどうか、多大の疑なきを得ない。

菊池契月の「茄子」は裝飾的傾向をもつたものであるが、中心のない平板な畫面には同情しがたい。茄子の葉ばかりを同じ色で塗りたてゝゐ

るのも智慧のないやり方である。

前田青邨の「御輿振」は往年の「竹取」より一步を進めた古繪卷研究の結果になるもので、「伴大納言」あたりから得る所のもつとも多いやうに見える。著想もおもしろく、輕妙で變化のあるところ、作者の將來あることを想はしめた作であつた。

山内多門の「郡上十二景」は雪舟あたりを覗つた描寫の努力を買ふべきもの、平井楳仙の「浦づたひ」はその技巧の妙を見るべく、結城素明の「甲ふたる馬」は洋畫式の裝飾的傾向の新味ある點をとるべきである。

西山翠障の「青田」、土田麥僊の「島の女」、都路華香の「豊兆」、小林古徑の「極樂の井」、富田雞仙の「鶺鴒船」など、彼等の常に歩まうとする努力のとるべきものがある。

風俗畫は概して振はない。尾竹兄弟の作は大に氣焰上らず、池田蕉園

の「ひともし頃」も、池田輝方の「都の人」もいふべきほどのものでない。島成園の「宗右衛門町の夕」は北野恆富の「日照雨」の亞流で、作者が妙齡の婦人なること及びその畫の艶麗なることによつて、衆俗の歡を迎へた。

西洋畫では南薰造の「六月の日」が丁度前年の「瓦焼き」と同じ所を行つたものである。たゞ人物と背景とがびつたりとあつてゐない所に多少の缺點は見えるが、併し、場中での佳作たるを失はぬ。小杉未醒の「豆の秋」は前年の「水郷」から更に一步を進めたもので、裝飾的效果の愈々進んだものであるが、圖様の難をいへば廣いものを強いて狭めた様な點のある事である。併し、「豆の秋」はたしかに「六月の日」と共に佳作であつた。

審査員の作では鹿子木孟郎の「某未亡人の肖像」と、和田英作の「夫人の肖像」とが、共にその穩健な作風に於て傑れた出來ばえであつた。鹿子木孟郎の「若王寺の瀧」も落ちつきのある作たるを失はぬ。黒田清輝

の「習作」、「木莓」、岡田三郎助の「偶成」はともに可もなく不可もない出来である。吉田博の三作は色彩が次第に生硬になりつゝ、ある様に思はれる。

中村不折の趣味は愈出て愈古典的になる。そして斯る題材を油繪で取扱ふのは、確に効果の上から見て不利な遣方である。

中澤弘光、山本森之助、中川八郎の諸作はいづれも穩當である。

佐藤哲三郎の「化粧」は其の濃艶な色彩が人目を惹いた。辻永の「無花果畑」はその得意な羊を描いたもの、池田治三郎の「女四人」と其に佳作たるべきである。

石井柏亭の「荷蘭の子供」及び「獨逸の女の」二つは新しい行き方で、大野隆徳の「落葉を拾ふ小兒等」にはおもしろい看方があつた。

坂本繁二郎の「うすれ日」は作者の内部のあるものが第三者にせまり

來るものが見えた。

彫刻の部では審査員の作品にも、あまり傑出したものはなかつた。員外では朝倉文夫の「若き日の影」が見るべきもので、彼は數年來一作毎に世評を高めつゝある。藤井浩祐の「潭」、建畠大夢の「ねむり」などもまづ無難である。審査については各部とも是非の論があるが、彫刻の部は比較的公平を以て稱せられてゐる。

第七回 大正二年

前回に起つた日本畫の分立は、それ自身に於て甚だ無意義なものであり、且つ、其の作物に就いて見る時は、それ自分に存在の理由を否定しつゝあるものであつた。

元來一科を創設した理由が、一部の畫家の黨派的偏見に基くものであ

る。然るが故に、その鑑査にも情實の加はれる點が歴々として指摘することが出来る。駄作、愚作の多いのは謂ふまでもない。

第一科中、特に目立つて多いものは文晁の摸倣である。佐竹永陵の「青山緑水」はその最も甚しきもの、次いで、松林桂月の「松林仙閣」、八木岡春山、岡田蘇水、竝に小坂芝田の作の如き、何れもそれである。益頭竣南の華山を摸倣することも甚しい。然し、彼等の多くは、唯の摸倣で而も一步もその埒外に出てゐない。加ふるに、江戸傳統の南畫には一種の匠氣紛々たるものがあつて、毫も高雅な韻致がない。是等の以外に高取稚成の「南淵魚水」、大坪正義の「管弦」の流はたゞ倭繪の粉本をたどつてゐるといふ以外に、何物をも見ることが出来ぬ。審査員の作中にも、往々にして愚劣、嗤ふべきものがある。かくて、第一科は全然その存在の理由をさへ失はうとしてゐる。その中に唯一點、一科のために氣を吐く傑

作がある。小室翠雲の「寒林幽居」は則ちそれだ。

翠雲の作には、いつもその才氣の縦横に煩はされて、高雅重厚の致を缺くものが多い。たゞ「寒林幽居」に到つては然らず、筆に猶すこしく落つきの足りない恨はあるが、筆墨ともに熟達して、よく畫面に統一があり整調がある。日本畫のすべてを通じて佳作といふべきものである。田中賴璋の「木曾山」、「田近竹邨の「乍晴乍雨」は比較的佳作といふべきであつた。第二科に移ると、第一科の無味單調に比して、その多趣多様にして佳作の多いのに悦ばされる。併し、審査員の作は概して振つたといふことは出来なう。

横山大觀の「松並木」は、すでに同氏の「山路」を見た眼には、それ以上の興味を呼び起すことの出来ない作であつた。殊に、細緻平板に流れて統一と中心とのないのはその缺點であつた。寺崎廣業の「千紫萬紅は」唐朝美

人を描いたものであるが、特に新趣の見るべきものはなく、その紙と墨とを用ゆる技巧に稍見るべきものがあるだけであつた。竹内栖鳳の「繪になる最初」はかなり世俗の悦を買ひ得た作であつたが、それは畢竟、世俗の趣味の低級なることを證するものに過ぎない。形態の拙なるはいふまでもなく、市氣匠氣の見るに堪へないものがある。山元春舉の「春夏秋冬」はその得意の擅場ではあるが、彼の作として特に推稱に値しない。川合玉堂の「夕月夜」、「雜木山」の二作は稍振へるものであるが、玉堂の弊はその調子のいつも同一で殆ど變化のない點にある。二作の中では「夕月夜」の方がまさつてゐると云ふ一般の世評であつた。

木島櫻谷の「驛路の春」は翠雲の「寒林幽居」と共に邦畫中の傑作と謂ふことが出来る。「驛路の春は」その構想の温健で、春風駘蕩たる太平を想はせるに足る。その技巧は狩野の一派に新味を附し、京都畫家一流

の輕薄の點がなく、特に傳彩の苦心に見るべきものがある。

審査員外の作としては、菊池契月の「鐵漿蜻蛉」がある。平板ではあるが、その色彩の淡泊で一種夢幻に似た靜境を描き出して、やゝ見るべきものがあつた。鏑木清方の「潮干狩」は佳作と謂ふべきであらう。橋本關雪の「遅日」には溫雅な筆で、ある程度にその氣持の出てゐたのを取るべきである。豎山南風は「霜月頃」を出して忽ち名をなしたが、まだ研究の餘地ある作と云ふべきものであつた。結城素明の「相思樹下金絲圖」は氏の特長を更に發揮したもので出色のものであつた。

牛田鷄村の「町三趣」は完備した作とはいひがたいが、一種の漫畫式の畫法に、蕭散な趣味を加へ、ある種の感じを描き出さうとする努力の買ふべきものがある。

この頃になつて次第に氣のつくことは、新しき試の多くが、裝飾的傾

向になりつゝあることである。そして寫生が多く細部にのみ流れて、全體としての印象を稀薄ならしめるものが多い。大觀の「松並木」の如きも、この弊を有するものと謂はねばならぬ。裝飾的傾向はそれ自身に於て必ずしも非難すべきものではない。唯、純然たる裝飾畫以外の作としては、裝飾的傾向以上により緊要なものがある。かつての觀山の「木間の秋」や春草の「落葉」にも裝飾的傾向は認められる。併し、此の二作の如きも裝飾以外に自然の心核に觸れる點を有し、觀者に生々たる印象を與へ得た。文展の日本畫が年を追うて、一種の惡趣味を生じつゝあることは、一部識者の寒心を買ふ所以であつた。

日本畫が次第に畫面の大を競うて、邪道に走らうとするとは反對に洋畫は次第に内省的ならむとする傾向を有するやうになつて來た。併し、一面、大作の殆んど見るべきものゝなくなつたのも事實とすれば、悦ぶ

べき傾向と云ふことは出来ぬ。

西洋畫へ轉じても審査員の作品には之といふ程の見ることの出来ないのは遺憾である。鹿子木孟郎の「加茂の競馬」は繪馬の如く、黒田清輝の「足立軍醫監」及び「蘭花」の二作もさしたる作とは思へぬ。岡田三郎助、中澤弘光、中村不折、山本森之助の諸作も、唯従前の面目を保つものと云ふに止る。

石井柏亭の「滯船」は清新で氣持のいゝものであつた。南薰造の「春さき」はしづかな情景のよく出てゐる點をとる。石川寅治の「渡の午後」はやゝペンキ畫たるの感はないでもないが、かなり努力のはいつた作である。

藤島武二の「うつつ」は技巧の大膽な點と、筆致に興味がある。長原孝太郎の「残雪」は裝飾的傾向の新しい試みではあるが、醇熟の域には達

しない。

齋藤豊作は色彩に對する感覺の豐潤な點に於て、人の意表に出づるものがある。「夕映の流」はその點に於て特筆に値する。

彫刻の部では依然として朝倉文夫の作を推す。「含羞」はその氣持のよくあらはれた無理のない作である。藤井浩祐の「坑内の女」も佳作にすべきであらう。審査員中の作品では新海竹太郎の「價千金」をとるべきであらう。

第八回 大正三年

文展は次第に出でて次第に益々對世間的となり、そこに安住し、満足して、ともかくも平和な倦怠な夢を續けてゆく。併し、夢はいつまでも續かない。文展改革といふ問題は、審査員の變化を生じた。そして横山大

觀の名が審査員中より除かれたのを機として、下村觀山は自ら之を辭し、二人相倚り、更に小杉未醒と結んで、日本美術院を創設した。蓋し岡倉覺三、橋本雅邦の一派と官畫との歴史的關係を知るものは、寧ろその事のあまりにおそいのを怪しんだかも知れぬ。

多少の例外はあるが、美術院派には新進氣鋭、ともかくも問題を提供する畫家が揃つてゐる。故に、量は僅に文展の三分の一にも満たない美術院の第一回の展覽會もその質に於ては、一步も文展に譲るところがなかつた。殊に、前田青邨の「竹取」の如き、安田靫彦の「御産の禱」の如き作物の文展に見ることの出来なかつたのは、衆口の一致して殆ど異議のない所であらう。

分立はひとり美術院にのみ留らなかつた。洋畫には更に又二科展覽會の起るものがあつた。されば、これら渦亂の第一年たる文展は多少の興

味を以て迎へられた。併し、寂寥は到る所に見出された。殊に日本畫に到つては院展が振へるだけに、更に又栖鳳、春舉の如き大家の出品がなただけに、その感の更に深いものがあつた。

改革の結果、日本畫の二科存立は中止となつた。之は寧ろあまりに當然なることである。審査員中では川合玉堂の諸作に最も見るべきものがある。「晚渡」、「駒嶽」、「夕立前」の三幅中、最後の作は、彼の蘊蓄を傾倒し、その特色の最も發揮せられたものであつた。寺崎廣業の「高山清秋」は觀山なく大觀なきの後、問題の中心たるの感があつた。然し、苦心努力の割合には印象の稀薄な恨があつた。それは、畫面の眼界があまり廣きに失して、緊張味に缺けてゐたからである。高島北海は畫家たり詩人たるには、あまりにその頭腦の科學者にちかく、科學者たるにはあまりに畫家に近い。その「魚介」の繪手本ともつかず、博物標本ともつかぬを

見れば、誰しも吾が言の人を欺かぬを知るであらう。

余はあまりに小室翠雲の作に、出来不出来の多いのに苦しむ。「寒林幽居」を出した後の彼に「逍遙」の如き、霸氣あり市氣ある作物を見るのは、果して何の故か。南畫としては、池田桂仙の「山高水遠」こそ見るべきものである。

木島櫻谷の「涼意」は單調ではあるが、その作畫の機縁の溫雅なるを取べきであらう。併し、之も「驛路の春」を見た眼に物足りないのはいふまでもない。契月の「ゆふべ」はその卑俗なる點の最も忌むべきは、いかなる故か。此をしも二等賞の一席に推した審査員の雅量は寧ろ憫むべきである。西田翠嶂の作「採桑」は櫻谷の「涼意」に近いもので、「ゆふべ」より遙に勝る。都路華香の「閑雲野鶴」は不快の作といふべきだ。

上村松園の畫は可もなく不可もない。風俗畫としては、鏑木清方の「墨

「田河舟遊」及び池田輝方の「兩國」を擧ぐべきであらう。二者ともに醇熟の境に近く、大構圖中よく統一あり、形似に無理もない。傳彩も亦かなり要を得たものである。國觀の「假睡」を見て、「油斷」の作を出した當年の意氣の銷磨し去れるを哀み、竹坡の作の漸く淺薄なるを惜しむものは、單に余のみではあるまい。

川村曼舟の「比叡山三題」、橋本關雪の「南國」、平井楳仙の「遼河の夏」の如きは、いづれもかなり新味を追ふに努め、土田麥僊の「散華」はその古典的なる題材に近代的感情をもらうとし、動的氣分をあらはさうとする努力の嘉すべきものがあるが、研究の餘地あることはいふまでもない。

平福百穂はかつて「茄子」の作を出して、人目を惹いたが、今回の「七面鳥」も亦附記するを忘れてはならなかつた。ただ意匠の貧弱な點を恨みとすべきである。

北野恒富の「願の糸」は直に人間を描いたものではなくて、人形芝居から得來つたものかも知れぬ。而も、その憧憬的氣分のみちた命題の最もよく描かれてゐる點は賞すべきである。

楳仙の「宮苑」も亦氣分本意の點で注目すべき作である。

西洋畫は二科會の分裂によつて、却つて、彼等に近い手法の漸く見え來らむとする點で興味を覺えた。

満谷國四郎の「浴後」には描法に變化を見ることは出来るが、むしろ力の足りない作である。「砂丘の裏」の方がまさつてゐる。中村不折の名は久しき前から吾々の興味を去つてゐる。「處女」及び「卞和玉を抱いて泣く」の二作から、吾等は何を教へられるであらう。

中澤弘光の「ながれ」は、作家の情緒と自然の韻律との融合して出來たやうに見える點に、妙味がある。黒田清輝、和田英作二氏の作は、大

した變化もなければ、さりとして見劣りのするものもない。

吉田博、中川八郎の諸作には多く云ふべきものがなく、小林萬吾の「和蘭の歌姫」はおもしろい出来である。

白瀧幾之助の「野村氏の像」はその穩健なる點を賞すべきである。うらゝかな朝」が親しみ易い。太田喜二郎の作は色も調子も整つてゐて佳作たるを失はぬ。中村彝の「少女」はその豊麗な色彩を驅使して、「少女」の肉體を通して現はれる感情を現した點がいゝ。對象にあくまで自己の感情を打ち込むだけに、充實した力がある。小寺健吉の「淺草の夏の眞晝」には構圖の上に難がある。片多徳郎の「夏山急雨」には、自然の印象を再現するに獨創的の境地がある。作畫の機縁には南畫やキュウビヅムが加つたかも知れぬが、とにかく、心持の出てるのはうれしい。

山脇信徳の「午後の海」も一種の畫面美を持つ。

彫刻の興味は吾々にとつては、いつも繪畫よりも後に來り、而も薄いものである。

「いづみ」は朝倉文夫の作だ。そして場中の佳作である。感興の動くま
まに従つて、而も精確の度を失つてゐない。北村四海の「水の精」は部
分的に調子の甘味がある。小倉右一郎の「不惑」には、達者な技巧を見
ても眞摯のあとを見えない難がある。新海竹太郎の「全力」は佳作と云
ふべきであらう。併し、此が果して氏の全力を意味するものならば、彼の
ために哀しまなくてはならぬ。

第九回 大正四年

文展對美術院と云ふことは、他の種の展覽會の文展に對するよりも、
もつと眞面目に考へられた。何故かといへば、少くとも其の日本畫だけ

に就いて見ると、美術院派は俊英の士を蒐めて研鑽努力、年を追うて人の視聽を惹かうとするものがある。彼等は一切に於て未知數である。而もその未知數なる所に大なる彼等の未來がある。畫界の新機運の或る方面は過去に於ても、彼等によつて誘導せられ啓發せられて來たからである。今後の消長も彼等に負ふところ最も大なるものありと考へられるからである。

公平にいふと彼等一派を抜いた文展の日本畫は頗る氣焰の上らないものであつた。そして、彼等を除いた後に残るものは、大家に多くは京都派の者があつた。概していへば京都派はその趣味に於てその傾向に於て退嬰的であり保守的である。こゝに於て院展が進取的であるに比して、文展は退嬰的と云ふも、妨げないとも思はれる。

再び公平に謂はしめよ。第一回の院展と同年の文展とを比較すれば、

その多趣にして活氣の横溢し、内容の精整せる點に於て、文展はたしかに院展に一等を輸したのであつた。是に於て世の視聽は、二者の今後に於ける發展に最も注がれるに到るのである。

然らば第九回の文展の日本畫は如何。第二回院展の邦畫は如何。文展を説くに院展を出さぬは對照上、興味の薄い恨がある。

第二回の院展は前年に比して更に振つてゐるやうである。下村觀山は「弱法師」の大作に、その蘊蓄を傾けて渾厚溫雅、技巧と内容との間に寸分の隙なき傑作を示し、大觀は「漁樵問答」と「竹雨」とに於て、作の良否はともかくも、手法上の問題を提供し、小林古徑は「阿彌陀堂」を描いて冥想的神祕の境を宗教的古建築に寄せて、識者を悦ばしめ、前田青邨は繪巻物研究の歩を進むること更に一段、「朝鮮の卷」に從來の輕佻を脱して健實味を想はしめ、富田溪仙の「宇治川の卷」は粗獷の難ありと雖も、ま

た捨て難く、豎山南風は「作業」に於てその努力を示し、今村紫紅は「入る日出る月」に於て、牛田雞村は「隅田川」に於て、北野恒富は「鏡の前」に於て、荒井寛方は「乳靡供養」に於て、何れもその技倆を世に問うてゐる。觀山の作を除いて未だ渾成の域に達したものはないが、而もいづれの作も問題を提供しないものはない。唯大觀の「山路」、松並樹、乃至は「瀟湘八景」を做うた畫風が、一の院展の色彩を作らうとしてゐるのは、自由を標榜し拘束を無視して立つ彼等としては、警戒に値するが、何れにしても、その活氣あることは特筆に値する。

精養軒の院展を去つて竹の臺の文展に入ると、其の數の多いのに一驚を喫する。再びその美人畫の多いのに愕く。三度平作凡作乃至駄作の少なからぬに驚く。最後に特筆すべき作の甚だ稀なるに驚く。

余は寺崎廣業の不斷の努力を嘉す。而して彼が、文展の邦畫を雙肩に

負うて立つの意氣を壯とす。「夜聽歌者」は彼に於ては、さしたる傑作ではあるまい。それよりも、濁染法によるその「信濃の山路」は、その研究的態度に服すべきと共に、佳作たるを失はぬ。

土田麥僊の「大原女」はその手法の大膽で破格な點に於て、寫生の根柢より脱したる裝飾傾向の點に於て、廣濶なる氣分を現すことに於て、完成はしてゐないが、傑れたものである。

鏑木清方の「晴れゆく村雨」は怖く春信あたりから得る所があつたものであらう。人物と蓮池との見方に於て筆者の位置の上の矛盾のあるのを除けば、筆の操縱と描寫の苦心に見るべきものがある。畫面の大に失したと云ふ恨はもとよりあるが。北野恒富の「暖か」はその感覺的なる點に於て人目を引く。更にその追従者の多いのにも驚かれる。

木島櫻谷の「うまや」は稱しがたく、契月の「浦島」は褒貶相半ばす

るも、夢幻的冥想的神秘的傳說的境地を描くに、友禪じみたる卑俗なる裝飾的描法を以てしたるは許しがたい。

町田曲江の「三大門」はその氣分のあらはれてゐるのがいゝ。三幅中では「出城」がいゝ。

平井楳仙の「夏」は洋畫の影響のあまり露骨になつてゐるのを惜しむべきだが、その努力は買ふに値する。橋本關雪の「獵」は才氣に煩はされて稍淺薄の恨はないか。構想の新意と寫生と裝飾の中間を行く中庸を得た製作である。「峽江の六月」の方が遙にいゝ。

池田輝方の「木挽町の今昔」は單に衣裳のみで今昔の區別を現はさうとしてゐるのはよくない。上村松園の「花がたみ」は開場前の評判に比しては頗る失望すべきものであつた。

高島北海の「峭壁摩天、斷層夾波」は愚作である。田中頼璋の「四季

の山」は筆に熟練の迹は見えるが、平凡の譏を免れない。小室翠雲の「夏景山水」、「駒ヶ嶽秋粧」では後者の方が佳い。手法の健實なる點の漸くまして來たのは、よろこぶべきである。

平福百穂の「朝露」は前年の「七面鳥」に比しては、劣つてゐるといふのが、一般の世評であつた。川村曼舟の「連峰映雪」には生硬の難を免れないと思ふ。

要するに院展の方は歩武の調うてゐる點がある。理解の件うた努力が見える。文展には稍もすると、倦怠安住のあとが見られ、審査の不統一と云ふ難がある。

西洋畫

審査員の作品中吾等の興味を惹く作は殆どない。藤島武二の「匂ひ」は即興的ではあるが、色の階調に味がある。「空」と題する雲を描いたも

のは聊か鬼面嚇人の趣がある。

黒田清輝の作には常に一種の氣韻がある。「跡見刀自」と云ふ肖像も傑作ではないが、その點がいゝ。

満谷國四郎の「魚市場」、「行水」はやゝおもしろい。岡田三郎助の「五十島の雪」は調子の微妙な中に情趣がある。

長原孝太郎の「晩春」はその年來進みつゝあつた傾向の漸く醇熟し來つた事を調する作で、東洋趣味を根柢として、新趣ある裝飾畫をなしてゐる。小寺健吉の「水のはとり」は氣持のいゝ佳作と云ふに留る。大野隆徳の「麥はたき」は往年の南薫造の作を想はせるものである。太田喜二郎の「薪」は畫面を大きくした點から來る構圖上の失敗が見える。「薪」よりも「暖き日」の方が遙にいゝ。南薫造の「農家の娘」及び「葡萄棚」を見ると、氏の傾向に漸く動搖のあることを思はせる。

中村彝は人物の研究に於て、独自の境地を持つてゐる。何よりもその態度の眞摯で、行くところまで行くと言つた調子が他の及ばぬところであらう。

柚木久太の「入江」は洋行後の初作として、佳作たるを失はぬ。海水などには一種の感じがおもしろく出てゐる。併し、まだ充分自分のものになつてゐないと云ふ點がありはしないか。小糸源太郎の「雨のあと」はいゝ作だ。

三宅克巳は水彩畫に十年一日の如く努力を拂ふ。「冬の小川」は周圍に無頓着に、かなりの感興の籠つた佳作と云ふことが出来る。

最後に和田英作の愚作「佐用姫」は往年の鹿子木孟郎の「インスピレーション」と共に、特記する値がある。

彫刻

大正四年

北村西望の「怒濤」は往年の和田三造の「南風」中の人物を思はしめるやうな作である。大作で無理のない作ではあるが、併し、作家と云ふものゝ現はれてゐない内容の空疎な作ではあるまいか。西望のそれに比して、北村「四海のイヴ」は場中の出色ある作である。材料驅使の理解はその裸體研究と相俟つて細緻な豊潤な効果を齎してゐる。

堀進二の「老婆の肖像」はその眞摯な點をとる。

新海竹太郎の鬼面嚇人の態度も漸く鼻につく。「釋迦八相」、「長袖善舞」の二作はいづれもとりがたい。建畠大夢の「夜の深み」もとりたてゝいふべき作ではない。

長谷川榮作の「春よ永劫なれ」は作者の今後を思はしめる。

第十回 大正五年

文展も終に其の第十年を迎へた。年々歳々、質に量に多少の進歩發展を見せてはゐるものゝ、今更考へて見ると、かなりの心細さを覺ぬでもない。とはいへ吾等は日本画壇の將來に對して杞憂を抱くものでは無論ない。唯、文展と云ふもののために、生じて來る一種の眞面目を缺いた傾向に對して、少なからず反感を持つ。

日本画の部は概して振はないと云ふのが妥當の評であらう。一ヶ月前に開かれた美術院の展覽會にかなり優秀のものがあつたために、特に此の感を深くせられるのかも知れない。何よりも驚くべきは、大作が多くなつたことである。殊に百數十點の出品中、屏風が其の三分の一を占めてゐるのには、驚を繰り返へさせられない譯には行かない。大作必ずしも不可ではないが、徒に画面の大を競うて人の視聽を惹かうとするものあ

らば、その志を陋とすべきである。

渾厚醇熟、審査員の作中最も見るべきものは、蓋し、川合玉堂の「行春」であらう。之は溪流に櫻の咲き残れるのを描いたもので、水や櫻花の描寫はさすがと思ふ點がある。右方の巖壁のぎこちなく而も平板なのは恨むべきだが、全体に行春といふ因襲的な感じを主とした作で、其の感じを或る程度まで彩色によつて表現した點を稱すべきであらう。山本春舉の「山二題」はあまり推稱しがたい。二作中、「たにむなし」の方がすぐれてはゐるが、手法の大膽はあるけれども、山の色は不快である。高島北海の「富士の裾野」は草花を描いたもので、依然として標本画の域を脱しない。小室翠雲の「天空海濶」は大作ではあるが、佳作ではない。寺崎廣業の「清麗」は唐美人を描いたものだが、之は必ずしも人物本位の画ではなく、唯、その美人の衣装や表情や其の背景を以て、清麗

といふ氣持の表現に努力したものである。衣装には眼ざむる程鮮麗な傳彩と暢達せる手練とがある。木島櫻谷の「港頭の夕」はこの作者としては、かなり行方のかはつたもので、平板の難のないでもないが、いつも見るやうな色彩に不快の點のないのはよい。菊池契川の「花野」は色彩の淡麗温雅で稍單調な點はかつての「鐵漿蜻蛉」に似てゐる。そして其の圖様は第二回院展の下村觀山の「弱法師」に得る所があつたらしく見える。未だ「弱法師」ほど渾化の域に達しがたいが、場中の佳作とすべきであらう。

員外の作に就いていへば、橋本關雪の「練丹」及び「寒山拾得」の二作には腕に任かせて描いたといふ跡が見ゆる。そして一種厭ふべき匠氣がある。關雪のためを取らない。平井棊仙の「都三十景」はともかくも努力の作である。併し、かうした作品はわけもなく一様に並べて見るべ

きものではない。この画は三回の院展の前田青邨の「京八景」と比較すべきものであらうが、後者の方がいづれもまとまりのある作であつた。

尾竹竹波の「ゆたかなる國土」は陶器画的の淺薄なものである。尾竹國觀の「文姫歸漢」は卑俗の画である。小野竹橋の「島二作」は佳作である。二作中では「早春」の方がすぐれてゐる。此の人は往年の南薰造と共通なものを持つてゐるやうである。桐谷洗鱗の「佛地憧憬の旅」はその努力の見るべきものがある。小山榮達の「北國さむらひ」は平板で中心のない繪である。池上秀畝の二作中では、「文姫辞胡」は繁褥の嫌がある。「夕月」の方が色の上に難があつても稍すぐれである。田中頼璋の「山月四趣」中では春と冬とが比較的勝れてゐる。土田麥僊の「三人の舞妓」は其の大膽なる表現が眼につく。

池田輝方の「夕立」は右方がすぐれてゐるが、蕉園の「去年の今日」

と共に中心のない繪ではあるまいか。松岡映丘の「室ぎみ」は珍しく生趣のある画として推稱すべきであらう。

結城素明の「歌神」も記すべきもの。平福百穂の「田澤湖傳説」は院展の川端龍子の「靈泉」を思はしめる作だが、印象が薄弱である。

西洋画

黒田清輝の「茶休」は清楚なる画である。満谷國四郎ではその行き方の變化が眼につく。今後の傾向こそ見ものであらう。和田英作の「あけがた」は愚劣である。岡田三郎助の「ヨネ桃の林」は小品だけれども、「水浴の前」よりも勝れてゐる。中川八郎、山本森之助、吉田博などの繪はいつも殆ど同じやうなまとまつた感じのする画ではあるが、自然を見る眼がその表面にのみしか及んでゐない。

南薫造の画は次第に推移しつつある。その「石橋」は、藤島武二の

「静」と共に見るべきものであらう。中澤弘光の作では「春日の神子」よりも「青き光」の方がまとまつてゐる。太田喜二郎の諸作は概して稱しがたい。それよりも小糸源太郎の「春」や「秋」が心を惹いた。

大野隆徳の「高原に働く人」小寺健吉の「水郷初夏」柚木久太の「湖雲一帯」などは、とりどりに佳い作である。

三宅克己の水彩では「夏景色」にまとまりが見えた。

彫刻の部では、新海竹太郎の「甲種合格」は俗悪である。「龍樹」の方がすぐれてゐる。北村四海の二品では、「水のほとり」がいゝ。朝倉文夫の「加藤先生の像」は穩當な出来である。その外では、北村西望の「栗」長谷川榮作の「S氏の像」國方林三の「春の夢」などが眼についた。

受賞品及審査員錄

第一回審查員

委員長 澤柳政太郎

主事 正木直彦

第一部 日本畫

主任 中澤岩太

松井直吉

大塚保治

松本靖

高嶺秀夫

岡倉覺三

川端玉章

荒木寬敏

今泉雄作

藤岡作太郎

橋本雅邦

寺崎廣業

下村觀山

菊地芳文

竹內栖鳳

野口小蘗

今尾景年

川合玉堂

橫山大觀

山元春舉

松本楓湖

小堀鞆音

第二部 洋畫

主任 松井直吉

中澤岩太

第一回審查員

森 林太郎

黒田 清輝

岩 村 透

淺 井 忠

松 岡 壽

久米桂一郎

岡田三郎助

和田英作

中村不折

小山正太郎

滿谷國四郎

第三部

彫

刻

主任

塚本 靖

大塚 保治

高村 光雲

石川 光明

竹内久一

長沼 守敬

白井保次郎

新海竹太郎

新納忠之介

大熊 氏廣

審査員出品

片時雨

東京 川合 玉堂

木下 暗

二百十日

東京 横山 大觀

曙色

雨霽

京都 竹内 栢鳳

海月

京都

山元 春舉

東京

川端 玉章

横山 大觀

靜女舞

東京 松本 楓湖

大佛開眼

東京 寺崎 廣業

春秋花鳥

京都 菊池 芳文

木問の秋

東京 下村 觀山

大澤博士肖像

東京 岡田 三郎助

高橋義雄氏肖像

東京 岡田 三郎助

肖像

東京 岡田 三郎助

白頭翁

東京 中村 不折

彫刻家

東京 中村 不折

武士の山狩

京都 淺井 忠

白芙蓉

東京 黒田 清輝

購夢

東京 滿谷 國四郎

ゆあみ

東京 新海竹太郎

露營

東京 新海竹太郎

第一回優賞品

日本畫

二等賞

しぐれ

京都 木島 櫻谷

辻說法

東京 野田 九浦

賢首菩薩

茨城 菱田 春草

三等賞

長夜

京都 上村 松園

廣寒宮

京都 西山 翠嶂

阿房劫火

茨城 木村 武山

豐公

東京 安田 靱彦

平和

東京 鈴木 華邨

悲報に接したる佛徒東京町田齒江

第一回優賞品

西鶴のおなつ

東京 島崎柳塙

曉風

京都 服部春陽

秋景山水

愛知 山本梅莊

六の華

東京 長野草風

石清水

京都 都路華香

釋迦蘋王

東京 信近春城

大宮人

東京 村田丹陵

落日

東京 植中直富

月下溪流

東京 野村文舉

まみづ鹽水

京都 樫野南陽

落葉

東京 島内松南

もの詣て

東京 榊原蕉園

咆哮

京都 西村五雲

山嫗

京都 谷口香蟠

諸菩薩問維摩詰

東京 橋本永邦

晚秋

京都 川北霞峯

驟雨

東京 山内多門

山法師

東京 鴨下晁湖

西洋畫

二等賞

南風

東京 和田三造

三等賞

森の奥

東京 山本森之助

夏の光

東京 中川八郎

夏

東京 中澤弘光

物思

東京 小林萬吾

ともしび

東京 橋本邦助

新月

東京 吉田博

畫室の沈黙

東京 高村眞夫

女繪師

東京 岡吉枝

畫室の一隅

東京 村上天流

夕の岬

東京 跡見

彫刻

三等賞

神來

東京 米原雲海

ゆくへ

東京 毛利教武

第二回審査員

第一部

委員長 岡田良平

日本畫

主任 中澤岩太

大塚保治

高嶺秀夫

川端玉章

今泉雄作

寺崎廣業

菊池芳文

野口小蘗

川合玉堂

主事 正木直彦

松井直吉

松本靖

岡倉覺三

荒木寛敏

藤岡作太郎

下村觀山

竹内栖鳳

今尾景年

横山大觀

第二回審査員

第二部

洋畫

主任

山元春舉
小堀鞆音
野村文舉
益頭峻南

松井直吉

大塚保治

塚本靖

黒田清輝

松岡壽

岡田三郎助

中村不折

滿谷國四郎

第三部

彫刻

主任

塚本靖

中澤岩太

高村光雲

松本楓湖
高島北海
山岡米華
望月金鳳

中澤岩太

藤岡作太郎

森林太郎

岩村透

久米桂一郎

和田英作

小山正太郎

鹿子木孟郎

大塚保治

松井直吉

石川光明

審査員出品

竹内久一
白井保次郎
新納忠之介

長沼守敏
新海竹太郎
大熊氏廣

秋山遊鹿

東京 川合玉堂

雨雪

東京 川端玉章

本郡高山植物

東京 高島北海

飼はれたる猿と兎

京都 竹内栖鳳

水車

東京 野村文舉

水墨山水

東京 山岡米準

雪松圖

京都 山元春舉

幽香楚々

東京 益頭峻南

月

東京 寺崎廣業

宿鴉

京都 菊池芳文

春花

京都 菊池芳文

雪中群猿

東京 望月金鳳

第二回優賞品

日本畫

二等賞

名士弔囊

京都 菊池契月

勝乎敗乎

京都 木島櫻谷

三等賞

第二回優賞品

月かけ

京都 上村松園

竹徑春淺

京都 川北霞峯

青山白雲

東京 小室翠雲

鳴瀧

東京 田中賴璋

轉道開悟

京都 西山翠嶂

おないとし

東京 鳥崎柳塢

諸神歡呼

京都 都路華香

閑庭

京都 上田萬秋

勿來關

東京 津端道彦

秋郊

京都 山田耕雪

やよひ

東京 榊原蕉園

深遠

東京 小阪芝田

罰

京都 土田麥僊

まきばの朝霧

東京 野村雪江

秋ばれ夕ざめ

京都 阿部春峰

秋山薄暮

京都 徳田隣齋

出陣

東京 荒井寛方

驢馬に夏草

京都 村上華岳

黄昏

京都 川村曼舟

遠智門圖

東京 尾形月三

寒林暮靄

京都 田近竹邨

西洋畫

二等賞

燐燐

東京 和田三造

雨後の夕

東京 吉田博

三等賞

北國の冬

東京 中川八郎

中條君の肖像

英國 フランク
ペレンスフォード

曲浦

東京 山本森之助

水のほとり

東京 橋本邦助

少女の肖像

東京 大森安仁子

夏の椽

東京 高村眞夫

晚煙

東京 跡見 泰

雄鹿半鳥の一角

東京 中澤弘光

漁夫の娘

東京 岡 吉枝

ものおもひ

東京 石橋和剛

蘭

東京 石川 寅治

藏

東京 九里四郎

初冬

東京 三宅 克巳

彫刻

二等賞

闇

東京 朝食 文夫

三等賞

閑靜

東京 建 島 大夢

寒山子

東京 米原雲海

大葉子

東京 山崎 朝雲

春秋一對

東京 北村四海

文覺

東京 荻原 守衛

第三回審査員

委員長 岡田良平

主事 正木直彦

第一部 日本 畫

主任 中澤岩太

松井直吉

大塚保治

松本靖

第三回審査員

第二部

主任 洋

畫

岡田三郎助	松岡壽	黒田清輝	藤岡作太郎	大塚保治	松井直吉	益頭峻南	野村文舉	小堀軔音	山元春舉	川合玉堂	野口小蘋	芳池芳文	寺崎廣業	今泉雄作	岡倉覺三	高嶺秀夫
-------	-----	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

和田英作	久米桂一	岩村透	塚本靖	森林太郎	中澤岩太	望月金鳳	山岡米華	高島北海	松本楓湖	橫山大觀	今尾景年	竹内栖鳳	下村觀山	藤岡作太郎	荒木寬畝	川端玉章
------	------	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

第三部 彫

中村 不折
満谷 國四郎

刻

主人 塚本 靖

中澤 岩太

高村 光雲

竹内 久一

白井 保次郎

新納 忠之介

小山 正太郎
鹿子 木孟郎

大塚 保治

松井 直吉

石川 光明

長沼 守敬

新海 竹太郎

大熊 氏廣

審査員元審査員出品

霧 東京 川合 玉堂

高嶺の雲二 東京 川合 玉堂

流燈 東京 横山 大觀

淺絳秋景山水 東京 山岡 米華

鹽原の奥秋冬 京都 山元 春舉

山梁及時 東京 益頭 峻南

高嶺の雲一 東京 川合 玉堂

春景山水 東京 川端 玉章

あれ夕立に 京都 竹内 栖鳳

鹽原の奥春夏 京都 山元 春舉

小楠公於四條噺奮戰 東京 松本 楓湖

旅路 東京 小堀 柄音

秋山雨後

東京 寺崎 廣業

溪四題

東京 寺崎 廣業

織月

京都 菊池 芳文

第三回優賞品

日本畫

二等賞

落葉

東京 菱田 春草

油斷

東京 尾竹 國觀

三等賞

雪中山水

東京 山室 翠雲

茸狩

東京 尾竹 竹坡

霞む春晴るる秋

東京 田中 賴璋

細雨空濛

京都 田近 竹邨

惡者の童

京都 菊池 契月

宴の暇

東京 榎原 蕉園

和樂

京都 木島 櫻谷

浦の夕

京都 川北 霞峯

山村暮靄

京都 川村 曼舟

牧童

京都 疋田 芳沼

射戲

東京 荒井 寛方

没落

京都 平井 棊仙

褒状

群鴨圖

東京 鈴木 華邨

曉露

東京 田村 豪湖

後苑

京都 阿部 春峯

牛小屋の夕

京都 高橋 菱雨

花見

京都 西山翠嶂

山雨欲來

東京 小坂芝田

桃園三傑

東京 山田敬中

寂寥

京都 高瀬春曉

三友

京都 八田春翠

獅子

京都 望月青鳳

興市宗高圖

東京 尾形月三

失意

東京 橋本關雪

放虎

東京 栗野觀鳳

施身聞偈

東京 島内松南

春の晨夏の夕

東京 野村雪江

鏡

東京 鱗木清方

花屋の庭

京都 古谷藤三

秋雨

東京 保間素尙

八百屋のかど

京都 人見勇市

西洋畫

二等賞

おもひ出

東京 中澤弘光

濁らぬ水

東京 山本森之助

千古の雪

東京 吉田博

三等賞

瀬戸内海

東京 中川八郎

美人讀書

在英 石橋和訓

砥石切

東京 跡見泰

幕間

東京 橋本邦助

停車場の夜

東京 高村眞夫

渡舟

東京 小林萬吾

湯ヶ島

東京 三宅克巳

第三回優賞品

褒 状

深山の夕

東京 眞山孝治

停車場の朝

東京 山脇信徳

山品

東京 中村 彝

三輪

東京 三上知治

海女

東京 岡 吉枝

白かすり

東京 渡邊ふみ

元學習院

東京 加藤 静兒

夕涼

東京 矢崎千代二

眞夏の山毛櫨

東京 河合新藏

碓氷の初冬

東京 中野營三

かぼちや

東京 寺澤孝太郎

葡萄

東京 石川寅治

八道雲

東京 長原孝太郎

蠟燭

東京 熊谷守一

熊野河口

東京 石井栢亭

山村

京都 都鳥英喜

森

東京 相田寅彦

静物

東京 永地秀太

彫 刻

三 等 賞

山から来た男

東京 朝倉文夫

北條虎吉肖像

東京 萩原守衛

褒 状

焦心

東京 國方天海

宇宙

東京 米原雲海

ゆく秋

東京 建島大夢

疲勞

東京 藤井浩祐

雄風

東京 北村西望

第四回審査員

一部

主事 正木直彦

主任 平山成信

今泉雄作

高島北海

下村觀山

菊地芳文

谷口香嶠

川合玉堂

中川忠順

山元春舉

益頭峻南

望月金鳳

松本亦太郎

松井直吉

川端玉章

荒木寛畝

寺崎廣業

小堀鞆音

竹内栖鳳

今尾景年

横山大觀

野村文舉

松本楓湖

佐久間鐵圃

菱田春草

中澤岩太

森林太郎

二部

主任 松井直吉

岩村透

岡田三郎助

鹿子木孟郎

中村不折

山本森之助

滿谷國四郎

森林太郎

黒田清輝

松岡壽

和田英作

吉田博

中澤弘光

小山正太郎

松本亦太郎

三部

主任 中澤岩太

石川光明

新海竹太郎

米原雲海

高村光雲

白井保次郎

大熊氏廣

山崎朝雲

審査員元審査員出品

忠孝双全

東京 益頭峻南

四季山水

東京 佐久間鐵園

四季花季	京都	谷口香嶠	秋景山水	東京	川端玉章
月下水禽圖	京都	今尾景年	役小角渡唐圖	東京	松本楓湖
威震秋江	東京	益頭峻南	孔雀	京都	菊池芳文
高千穂	東京	川端玉章	夏の一日	東京	寺崎廣業
寂寥	京都	山元春舉	蜀道七盤關眞景	東京	高島北海
長城の夕	東京	寺崎廣業	長江の朝	東京	寺崎廣業
雄圖	東京	小堀軻音	覽障圖	茨城	下村觀山
歲寒三友	東京	荒木十畝	楚水の卷	東京	横山大觀
若竹	京都	菊池芳文	炊煙	東京	川合玉堂
黒き猫	東京	菱田春草	溪流	東京	吉田博
宵像	東京	和田英作	島と松	東京	山本森之助
溫泉	東京	中澤弘光	くもり	東京	岡田三郎助
雲界	東京	吉田博	まともものあかり	東京	和田英作
五月雨	東京	山本森之助	二階	東京	満谷國四郎
紀州勝浦	京都	鹿子木孟郎	薔薇	東京	和田英作
荒苑斜陽	東京	黒田清輝			

半諾迦尊者

東京 中村 不折

ひなた

東京 岡田三郎助

林泉

京都 鹿子木孟郎

劍ヶ峰より

東京 吉田 博

まひろ

東京 中澤 弘光

山中湖畔

東京 満谷國四郎

いはや

東京 山本森之助

雨前の山中湖

東京 満谷國四郎

黙

東京 新海竹太郎

東奥の乙女

東京 山崎朝雲

仙丹

東京 米原 雲海

和氏璧

東京 米原 雲海

竹取翁

東京 米原 雲海

斥候

東京 新海竹太郎

達磨

東京 山崎 朝雲

きんの棒

東京 新海竹太郎

第四回優賞品

日本畫

二等賞

供燈

京都 菊池 契月

おとづれ

東京 尾竹 竹坡

三等賞

女歌舞伎

東京 鑷木 清方

からくり

京都 木島 櫻谷

上苑賞秋

京都 上村 松園

少將伊衡

東京 高橋 廣湖

秋のしらべ
冬のまとね

初冬

大佛炎上

褒 状

逢坂山の逕

秋山曉靄

夏山浴雨

海と山

深林

園の花

渡船

入江の朝

松林高士

四季の花

あひるのつど

西洋畫

二等賞

第四回優賞品

東京 榎原 蕉園
東京 池上 秀畝
京都 平井 樑仙

孔雀王
山海圖
夕月

茨城 木村 武山
東京 小室 翠雲
京都 川村 曼舟

京都 上田 萬秋

暮雪
姿の關守

京都 庄田 鶴友

京都 田近 竹邨

朝霧寒林

東京 島崎 柳塢

東京 松林 桂月

車争ひ

東京 田中 頼璋

東京 島内 松南

琵琶行

東京 荒井 寛方

東京 小阪 芝田

秋の色

東京 橋本 關雪

京都 三宅 吳曉

葵祭

東京 平田 松堂

東京 村岡 應東

寂雨

東京 尾形 月三

京都 徳田 隣齋

大宮人

京都 服部 春陽

京都 池田 桂仙

ながき日

東京 山村 耕花

東京 中倉 玉翠

京都 榎原 紫峯

京都 有井 祥雲

巖壁

東京 中川 八郎

三等賞

讀書の後

東京 山下 新太郎

九十九里

東京 青山 熊治

柚

東京 小杉 未醒

海邊の村

東京 中村 彝

坐せる女

東京 南 薫造

コツク場

東京 平岡 權八郎

茶屋

東京 八條 彌吉

老人

東京 九里 四郎

ネルのきもの

東京 渡邊 與平

奈良

東京 矢崎 千代治

湖畔

東京 眞山 孝治

褒状

窓邊の肖像

東京 田邊 至

灯

東京 薄 拙太郎

かげの人

京都 寺松 國太郎

張り物

東京 坂本 繁二郎

牧夫

東京 田中 良

白薇薔

東京 鈴木 錠吉

静物

東京 仙波 均平

静けきゆふへ

東京 相田 寅彦

神の森

東京 吉田 ふじな

黄菊白菊

東京 片多 徳郎

燈下

東京 夏目 七策

朱胴

東京 柳 敬助

曇

神奈川 大橋 正堯

牧場

東京 池田 永治

飼はれたる山羊

東京 辻 永

風伯

東京 長原 孝太郎

白粉の女

東京 長谷川 昇

若松

東京 水野 以文

彫 刻

二等 賞

墓守

東京 朝倉 文夫

三等 賞

女

東京 荻原 守衛

褒 狀

髪洗

東京 藤井 浩祐

化粧

東京 石川 確治

湯あがり

東京 内藤 伸

ポンヤリした馬

東京 池田 勇八

埃

東京 建島 大夢

第五回審査員

第一部

日本 畫

主事 正木 直彦

主任 平山 成信

今泉 雄作

荒木 寛敏

川端 玉章

松本 亦太郎

高島 北海

第五回審査員

第二部

西洋畫

主任

森 林太郎

松本亦太郎

岩村 透

久米桂一郎

和田英作

吉田 博

寺崎廣業

小堀 鞆音

竹内 栖鳳

今尾 景年

横山 大觀

山元 春舉

佐久間鐵園

菱田 春草

紀 叔雄

下村 觀山

菊池 芳文

谷口 香嶠

川合 玉堂

中川 忠順

益頭 峻南

望月 金鳳

山岡 米華

正木 直彦

黒田 清輝

松岡 壽

岡田 三郎助

鹿子木孟郎

中村 不折

第三部 彫刻

中澤弘光
小山正太郎
中川八郎

山本森之助
滿谷國四郎

主任 塚本靖

高村光雲

石川光明

竹内久一

白井保次郎

新海竹太郎

大熊氏廣

米原雲海

山崎朝雲

審查員元審查員出品

細雨

東京 川合玉堂

水墨山水

東京 山岡米華

雨

京都 竹内栖鳳

子雀

京都 菊池芳文

羅浮

京都 谷口香嶠

避邪迎福圖

東京 佐久間鐵園

雨後山水

東京 川端玉章

山路

東京 橫山大觀

墨牡丹

東京 益頭峻南

支那風景

東京 寺崎廣業

第五回審查員出品

朝	東京	吉田	博	高原の花	東京	中川	八郎
港の雨	東京	滿谷	國四郎	春の山	東京	山本	森之助
草花	東京	和田	英作	飯島博士の肖像	東京	滿谷	國四郎
百日紅	東京	黒田	清輝	残雪	東京	山本	森之助
インスピレーション	京都	鹿子	木孟郎	小金井博士肖像	東京	和田	英作
奈良の晩春	東京	中澤	弘光	浴場にて	東京	岡田	三郎助
造船場	東京	中川	八郎	ポップラ	東京	中川	八郎
炭焼く烟	東京	山本	森之助	曇り日	東京	和田	英作
嵯峨のほとり	東京	中澤	弘光	白い色	東京	滿谷	國四郎
芥屋大門	東京	吉田	博	暖爐の前	東京	中澤	弘光
夏草	東京	黒田	清輝	跋陀羅尊者	東京	中村	不折
高橋博士肖像	東京	黒田	清輝	舞子の濱	京都	鹿子	木孟郎
鐵槌	東京	新海	竹太郎	一休和尚	東京	新海	竹太郎
一致	東京	新海	竹太郎	林和靖	東京	山崎	朝雲
滄溟	東京	山崎	朝雲	天樂	東京	米原	雲海
観音	東京	米原	雲海	専念	東京	米原	雲海

電

第五回優賞品

東京 山崎 朝雲

千仞の壑

東京 白井保次郎

日本畫

二等賞

若葉の山

京都 木島 櫻谷

水

東京 尾竹 竹坡

三等賞

日光山の四季

東京 山内 多門

春景秋景山水

東京 小室 翠雲

人真似

東京 尾竹 國觀

日照雨

大阪 北野 恒富

秋山晚晴

東京 松林 桂月

松の月

京都 都路 華香

花ぐもり

東京 榑原 紫峯

褒状

溪山積翠

東京 小坂 芝田

竹取

東京 前田 青邨

谷間

東京 池上 秀畝

うたげの装

東京 津端 道彦

まきばの夕

京都 西村 五雲

竹林の聽法

東京 荒井 寛方

二月の頃

京都 村上 華岳

佛教東に來る

大阪 野山 九浦

斐

京都 土田 夢僊

休み

京都 大村 廣陽

第五回優賞品

髪

東京 池田 蕉園

漁歌

京都 山下 竹齋

伊勢物語

東京 島内 松園

山雲吞吐

京都 田近 竹邨

朝顔と驛路の女

東京 楠木 清方

あかつち山

京都 平井 樑仙

萬竿煙雨

京都 山田 介堂

厩

京都 廣田 百豊

護花鈴

東京 今村 紫紅

耶馬溪の朝

京都 庄田 鶴友

噴火口

京都 川北 霞峯

高野山の夏

京都 川村 曼舟

孤村の夕

東京 山田 敬中

片岡山のほとり

東京 橋本 關雪

蛇皮線

京都 松村 梅叟

囀

東京 結城 素明

夾竹桃

京都 廣江 霞舟

菩提達磨

東京 吉川 準

重衡

東京 伊東 紅雲

南泉

東京 越塚 友邦

兵燹

東京 小山 榮達

一休

東京 橋本 正素

上加茂

京都 高橋 春曉

新承恩澤

東京 須佐 天齋

西洋畫

二等賞

水郷

東京 山杉 未醒

金佛

東京 青山 熊治

丸焼き

東京 南 薰 造

三等賞

窓際
海岸
東京 山下新太郎
東京 坂本繁二郎

襖
狀

女
東京 中村 勢

或人の母
裁縫
東京 片多 徳 郎

サン、ミシエル橋畔
在佛國石 井 栢 亭

午後三時
彫 刻
東京 白瀧 幾之助

初秋
東京 三 上 知 治

大阪 赤松 麟 作

果物
東京 松 村 巽

三等 賞

ながれ
鏡の前
東京 建 島 大 夢

土人の顔(二)
東京 朝 倉 文 夫

襖
東京 藤 井 浩 祐

維摩一默
東京 平 籙 田 仲

狀

うさぎ馬
壯者
東京 池 田 勇 八

女郎花
東京 北 村 四 海

もたえ
東京 北 村 西 望

なんな
東京 新 田 藤 太 郎

哀愁
東京 國 方 天 海

荒川嶽
東京 石 井 鶴 三

東京 堀 進 二

第六回 審査員

文展十年

日本畫

主任

武井守正

入江爲守

今泉雄作

今尾景年

川合玉堂

橫山大觀

谷森眞男

高島北海

小堀軔音

竹內栖鳳

塚本靖

中川忠順

山岡米華

西洋畫

主任

森林太郎

岩村透

山本梅莊

山元春舉

松本亦太郎

益頭峻南

寺崎廣業

荒木寬畝

佐久間鐵園

紀澁雄

菊地芳文

下村觀山

平山成信

望用金鳳

岡田三郎助

和田英作

審査員元審員出品

彫刻

鹿子木孟郎

久米桂一郎

吉田博

黒田清輝

中澤弘光

山本森之助

中川八郎

松岡壽

中村不折

小山正太郎

竹内久一

高村光雲

長沼守敬

大熊氏廣

山崎朝雲

石川光明

白井雨山

米原雲海

新海竹太郎

園の秋

東京 荒木十畝

葡萄

東京 荒木十畝

夏景山水

愛知 山本梅莊

玄雲匝地

東京 益頭峻南

茂松清泉圖

東京 佐久間鐵園

ダリヤ

東京 高島北海

積翠

東京 高島北海

水墨夏景山水

東京 山岡米華

松上烏鷺圖

東京 望月金鳳

嵐峽

京都 山元春舉

躍鯉圖

京都 今尾景年

潮

東京 川合玉堂

瀟湘八景

東京 橫山大觀

瀟湘八景

東京 寺崎廣業

鴨東の妓

京都 鹿子木孟郎

某未亡人肖像

京都 鹿子木孟郎

若王寺の瀧

京都 鹿子木孟郎

習作

東京 黒田清輝

木葺

東京 黒田清輝

偶成

東京 岡田三郎助

飛驒の深山

東京 吉田博

寢覺の床

東京 吉田博

奔湍

東京 吉田博

道

東京 中村不折

巨人の跡

東京 中村不折

迦諾迦伐隣尊者

東京 中村不折

波のあと

東京 山本森之助

砂濱

東京 山本森之助

岸の丘

東京 中澤弘光

乳の祈願

東京 中澤弘光

鼓

東京 中澤弘光

磯打つ波

東京 中川八郎

夏の朝

東京 中川八郎

松上の日の出

東京 中川八郎

石黒男爵の肖像

東京 和田英作

某夫人の肖像

東京 和田英作

左丘明

東京 新海竹太郎

姝女の熟睡

東京 新海竹太郎

戦捷記念日

東京 新海竹太郎

虚心

東京 米原雲海

便なき身

東京 白井雨山

供養の乳

東京 山崎朝雲

第六回優賞品

山そだち 東京 山崎朝雲 竹生島 東京 山崎朝雲

日本畫 第一科

二等賞

秋爽 東京 小坂芝田 火牛 東京 津端道彦

三等賞

楢の秋 東京 池上秀畝 水郭の春 東京 田中頼璋

寒汀 東京 松林桂月 山王祭 東京 尾形月耕

四時佳興 東京 小室翠雲 夏景山水冬景山水 東京 佐竹永陵

藤房卿の草子 東京 高取稚成

褒狀

赤壁夜遊圖 東京 井村貫一 群鹿 東京 望月青楓

層巒積雪 京都 素金石 志摩大王崎 東京 田南岳璋

蘆鶴之圖 東京 近藤樵仙 深遠 京都 田近竹邨

竹溪細雨圖 京都 池田桂仙 尙齒會 愛知 森村宜稻

稻の漚 東京 芝景川 宴 東京 磯田長秋

第六回優賞品

溪山滿翠

大阪 水田 竹圃

船過孟浪梯圖

京都 内海 吉堂

松下煎茗

東京 橋本 關雪

第二科

二等賞

寒月

京都 木島 櫻谷

夢殿

東京 安田 靱彦

近江八景

東京 今村 紫紅

三等賞

茄子

京都 菊池 契月

御輿振

神奈川 前田 青邨

郡上十二景

東京 山内 多門

青田

京都 西山 翠嶂

浦づたひ

京都 平井 樑仙

釣日和

京都 小村 大雲

褒狀

木々の秋

東京 平田 松堂

天女の巻

東京 飛田 周山

島の女

京都 土田 夢僊

白い雨

京都 廣江 霞舟

甲ふたる馬

東京 結城 素明

挑戦

東京 伊東 紅雲

にわかあめ

東京 尾竹 竹坡

ひとつしころ

東京 池田 蕉園

白映

東京 石井 天風

勝鬨

東京 尾竹 國觀

豐兆

京都 都路 華香

鶯

京都 松村 梅臈

栗の秋

東京 村上 鳳湖

都の人

東京 池田 輝方

くさむら

京都 山下 馬山

御宝躰

京都 阿部 春峯

諺

京都 原田 西湖

後醍醐帝

東京 橋本 關雪

犠牲

東京 北上 峻山

極樂の井

東京 小林 古徑

鶴船

京都 富田 溪仙

水牛

京都 大村 廣陽

秋林

東京 保間 素堂

宗右衛門町の夕

大阪 島成 園

幽淵起雲圖

京都 庄田 鶴友

枇杷

京都 柳原 苔山

夏の雨

京都 藤井 雪田

鶉

東京 三枝 素光

かすみ綱

京都 加藤 英舟

ゆきぞら

京都 佐藤 一星

西洋畫

二等賞

豆の秋

東京 小杉 未醒

六月の日

東京 南 薫造

三等賞

化粧

東京 佐藤 哲三郎

無花果畑

東京 辻 永

女四人

京都 池田 治三郎

褒状

落葉を拾ふ小兒等

東京 大野 隆徳

荷蘭の子供

東京 石井 栢亭

第六回優賞品

文 展 十 年

甲良ほし

京都

田邊

至

花園にて

京都

安宅安五郎

屋後

愛知

加藤

静兒

鳳仙花

東京

香田曝太

彫 刻

三 等 賞

「若き日」の彫

東京

朝倉

文夫

潭

東京

藤井浩祐

れむり

東京

建島

大夢

第七回審査員

日 本 畫

主任

武井

守正

今泉

雄作

横山

大觀

高島

北海

塚本

靖

山岡

米華

松本

亦太郎

小堀

駈音

入江

爲守

川合

玉堂

谷森

眞男

竹内

栖鳳

中川

忠順

山元

春舉

益頭

峻南

寺崎

廣業

西洋畫

荒木寬畝
木島櫻谷
菊地芳文
平山成信
森琴石

主任

森林太郎

岡田三郎助

鹿子木孟郎

中川八郎

中澤弘光

黒田清輝

小山正太郎

彫刻

主任

高村光雲

米原雲海

長沼守敬

佐久間鐵園

紀淑雄

下村觀山

望月金鳳

岩村透

和田英作

吉田博

中村不折

久米桂一郎

松岡壽

大熊氏廣

竹内久一

山崎朝雲

第七回審査員

白井雨山

新海竹太郎

審査員元審査員出品

棕櫚と蘇鐵

東京 荒木十畝

萬壑松濤

東京 山岡米華

溪山捕魚寒山歸樵

東京 佐久間鐵園

洞庭雪後

東京 益頭峻南

梅雨早秋

東京 高島北海

春夏秋冬

京都 山元春舉

千紫萬紅

東京 寺崎廣業

夕月夜

東京 川合玉堂

雜木山

東京 川合玉堂

驛路の春

京都 木島櫻谷

松並木

東京 横山大觀

繪になる最初

京都 竹内栖鳳

聽雨

東京 山本森之助

汀つたひ

東京 山本森之助

女の顔

東京 岡田三郎助

凝視

東京 岡田三郎助

神農

東京 中村不折

老孔二聖之會見

東京 中村不折

初秋の朝

東京 吉田博

漁村の西日

東京 吉田博

酒田港

東京 吉田博

夕風

東京 中川八郎

おだやかな朝

東京 中川八郎

夕立前

東京 中川八郎

海苔とる娘

東京 中澤弘光

水に近く

東京 中澤弘光

足立軍醫監

東京 黒田清輝

菊花

東京 黒田清輝

加茂の競馬

京都 鹿子木孟郎

吉祥寺觀牡丹

東京 米原雲海

沙金

東京 米原雲海

價千金

東京 新海竹太郎

満足

東京 新海竹太郎

嗚呼老矣

東京 新海竹太郎

觀音

東京 山崎朝雲

兩悠悠々

東京 山崎朝雲

面

東京 白井保次郎

第七回優賞品

日本畫 第一科

二等賞

幽邃

東京 小坂芝田

寒林幽居

東京 小室翠雲

三等賞

松林仙閣

東京 松林桂月

木曾山中殘雪

東京 田中頼璋

南淵魚水

東京 高取稚成

四時清娛

京都 池田桂仙

眞似

東京 津端道彦

猿

東京 望月青鳳

褒狀

乍雨乍晴

京都 田邊竹邨

青山綠水

東京 佐竹永陵

積翠塔影

京都 山田介堂

畿甸八景

東京 田南岳璋

第七回優賞品

一一一

溪山鏈響

東京 田村 豪湖

管絃

東京 大坪 正義

五月霽

東京 池上 秀畝

水と陸

東京 磯田 長秋

湖山清曉

大阪 矢野 橋村

第二科

二等賞

鐵漿蜻蛉

京都 菊池 契月

遅日

兵庫 橋本 關雪

相思樹下把金糸圖

東京 結城 素明

霜月頃

東京 豎山 南風

三等賞

螢

京都 上村 松岡

銀杏

京都 山田 耕雲

麓の秋

東京 西村 青歸

驟雨

京都 山下 竹齋

林の中から

東京 勝田 勝琴

放ち飼

京都 小林 大雲

雨の後

東京 大智 勝觀

春

京都 星野 空外

櫻雲

京都 玉舎 春輝

鶉

京都 山内 信一

褒状

柿

京都 田畑 秋濤

大衆勢

東京 小山 榮達

熱果

東京 矢澤 弦月

炭焼き

京都 八田 高容

秋興

京都 西村 五雲

六月の谷

東京 村上 鳳湖

志摩の波切村 京都 小林霞村

祭りのよそほひ 大阪 島成園

箒 東京 渡邊菜渚

唐もろこし 京都 櫛文峰

温室圖 京都 青山好孝

かるきつかれ 東京 鏑木清方

白粉の花 京都 松村梅叟

西洋畫

二等賞

滯船 東京 石井栢亭

港の午後 東京 石川寅治

三等賞

つつつ 東京 藤島武二

ハチスとシチン 東京 五味清吉

カツフェの女 東京 太田三郎

櫛 京都 寺松國太郎

褒状

夕榮 京都 榊原紫峰

天草四郎 大阪 野田九浦

朝と夕 東京 長野草風

萩 京都 中津川涼風

住吉詣 東京 松岡映丘

夏雨 東京 濱谷白雨

祈禱 京都 西櫻洲

春さき 東京 南薰造

草刈 東京 矢崎千代二

ホブラーと夏蜜柑 京都 河合新藏

しぼり 東京 永地秀太

殘雪

東京 長原孝太郎

志願の端

大阪、廣瀬勝平

おきな

大阪 赤松麟作

曇り日

東京 田邊 至

夕映の流

東京 齋藤豊作

緑の蔭

東京 安宅安五郎

彫刻

二等賞

含羞

東京 朝倉文夫

三等賞

坑内の女

東京 藤井浩祐

褒状

神山詣り

東京 池田勇八

木蓮

東京 石川 確治

空想に耽り居る女

東京 北村 四海

某人の肖像

東京 畑 正吉

寂靜

東京 吉田 白嶺

牛刀

東京 内藤 伸

第八回審査員

日本畫

主任 武井守正

川合玉堂

高島北海 今尾景年

西洋畫

主任

竹內 栢鳳
山元 春舉
小室 翠雲
佐久間 鐵國
平山 成信

山本 梅莊
小堀 慄音
寺崎 廣繁
菊地 芳文
森 琴石

彫刻

主任

森 林太郎
和田 英作
中村 不折
松岡 壽
滿谷 國四郎

岡田 三郎助
中川 八郎
黒田 清輝
藤島 武二

高村 光雲
山崎 朝雲
新海 竹太郎

米原 雲梅
白井 雨山

審査員元審査員出品

第八回審査員出品

駒ヶ嶽

東京 川合玉堂

晩渡

東京 川合玉堂

夕立前

東京 川合玉堂

魚介

東京 高島北海

水墨松林山水

愛知 山本梅莊

楠正行救敵兵圖

東京 小堀鞆音

逍遙

東京 小室翠雲

涼意

京都 木島櫻谷

高山清秋

東京 寺崎廣業

雨後

東京 荒木十畝

小雨ふる吉野

京都 菊池芳文

黄昏

東京 和田英作

赤い燐寸

東京 和田英作

逍遙

京都 鹿子木孟郎

水の流れ

京都 鹿子木孟郎

春

東京 吉田博

ばら

東京 吉田博

牛車

東京 吉田博

杏花の村

東京 中川八郎

最上川

東京 中川八郎

日本アルプス

東京 中川八郎

卍和璞を抱て泣く

東京 中村不折

女瀧

東京 中澤弘光

灯

東京 中澤弘光

ながれ

東京 中澤弘光

もろる日影

東京 黒田清輝

其日のはて

東京 黒田清輝

清潭

東京 山本森之助

岩山

京都 満谷國四郎

砂丘の裏

京都 満谷國四郎

旅人

東京 米原雲海

耀歌

東京 山崎朝雲

香川景樹肖像

東京 白井雨山

すずし

東京 白井雨山

全力

東京 新海竹太郎

勤勉

東京 新海竹太郎

第八回優賞品

日本畫

二等賞

ゆふへ

京都 菊地契月

舞したく

京都 上村松園

比叡山三題

京都 川村曼舟

隅田川舟遊

東京 齋木清方

閑雲野鶴

京都 都路華香

南國

京都 橋本關雪

三等賞

簡是劉家黑牡丹

東京 結城素明

遼河の夏

京都 平井樑仙

秋聲

東京 松林桂月

山高水遠

京都 池田桂仙

採桑

京都 西山翠嶂

七面鳥

東京 平福百穂

憩ひ

京都 山村大雲

溪間の秋

京都 川北霞峯

蓋簪

東京 田中頼璋

兩國

東京 池田輝方

琉球の花

福岡 水上泰生

小鳥の聲

東京 平田松堂

褒状

春雲秋靄

京都 田邊竹邨

中暮のあと

東京 池田蕉園

第八回優賞品

一一七

晴潭

東京 池上秀畝

矢頃

東京 小山榮遠

暮れ行く秋

京都 庄田鶴友

笈

京都 石崎光瑤

散華

京都 土田夢僊

初夏の日

東京 阿島徹郎

琉球所見

大阪 岡田雪窓

畫室の花

京都 松村梅叟

紅蘭女史

東京 島崎柳塙

秋聲

京都 秦金石

雨後

大阪 矢野橋村

鴻

京都 山田耕雲

廣間へ

東京 河崎蘭香

櫛

京都 林文塘

清溪漁隱

京都 山田介堂

青東風

京都 五舎春輝

唐美人

東京 山田敬中

鴨川の春

兵庫 高倉觀崖

雲林清深

大阪 水田竹圃

梅妃楊貴妃

大阪 野田九浦

遮那王

東京 尾形月三

山路の秋

京都 山下竹齋

うたたれ

京都 西櫻洲

昔囁

東京 河合英忠

幼なごち

東京 栗原玉葉

立話し

京都 黒田芳沼

西洋畫

二等賞

野村氏の像

東京 白瀧幾之助

歸り路

京都 太田喜二郎

三等賞

少女 東京 中村 弊

初秋 東京 辻 永

褒 状

お茶とき 東京 安田 稔

港 東京 吉村 芳松

養鶏家 東京 高間 純七

銅 東京 田中 白

酒倉 東京 尊宮 一念

彫 刻

二 等 賞

いづみ 東京 朝倉 文夫

三 等 賞

トロなまつ坑夫 東京 藤井 浩祐

のぞき 東京 建島 大夢

褒 状

光に浴せる女 東京 堀 進二

犠牲者 東京 戸張 孔雀

殘雪 東京 長原孝太郎

曇り日

夏山急雨

淺草の眞晝

午後の海

所感

水の精

あらより

同盟罷工

東京 小倉右一郎

東京 北村 四海

東京 吉岡 芳明

東京 渡邊 長男

第八回優賞品

文展十年

秣

東京池田勇八

第九回審査員

日本畫

主任 武井守正

川合玉堂

竹内栖鳳

山元春舉

小室翠雲

荒木十畝

平山成信

主任 森林太郎

和田英作

中村八郎

黒田清輝

滿谷國四郎

今泉雄作

高島北海

山本梅莊

小堀鞆音

寺崎廣業

菊地芳文

岡田三郎助

中村不折

藤島武二

彫刻

主任 高村光雲

山崎朝雲

新海竹太郎

米原雲海
白井雨山

審査員元審査員出品

峭壁摩天斷層夾波 東京 高海北海

駒ヶ嶽秋粧

東京 小室翠雲

夏景山水 東京 小室翠雲

うまや

京都 木島櫻谷

夜聽歌者 東京 寺島廣業

信濃の山路

東京 寺崎廣業

四季花鳥 東京 荒木十畝

鶴鴿

京都 菊池芳文

黒き帯 東京 岡田三郎助

川邊

東京 岡田三郎助

五十島の雪 東京 岡田三郎助

佐用姫

東京 和田英作

書齋に於ける
平瀨介翁

東京 鹿子木孟郎

札幌郊外

京都 鹿子木孟郎

札幌郊外 京都 鹿子木孟郎

穂高山

東京 吉田博

奔流 東京 吉田博

初秋

東京 吉田博

高山の夏三題 東京 中川八郎

高山の夏三題

東京 中川八郎

高山の夏三題 東京 中川八郎

補柄

東京 中村不折

第九回審査員

長養

東京 中村 不折

三つの思ひ

東京 中澤 弘光

ゆく春

東京 中澤 弘光

夏の人

東京 中澤 弘光

跡見刀自

東京 黒田 清輝

鯉船

東京 山本 森之助

凍れる小川

東京 山本 森之助

空

東京 藤島 武二

匂ひ

東京 藤島 武二

魚市場

東京 満谷 國四郎

島

東京 満谷 國四郎

行水

東京 満谷 國四郎

曠野

東京 米原 雲海

松風

東京 米原 雲海

みなかみ

東京 山崎 朝雲

獲物

東京 山崎 朝雲

薬研

東京 山崎 朝雲

釋迦八相

東京 新海 竹太郎

新兵

東京 新海 竹太郎

長袖

東京 新海 竹太郎

第九回 優賞品

日本畫

二等賞

晴れ行く村雨

東京 鏑木 清方

浦島

東京 菊池 契月

連峯映雪

京都 川村 曼舟

四季の山

東京 田中 頼璋

秋晴

東京 池上 秀畝

花がたみ

京都 上村 松園

木挽町の今昔

東京池田輝方

夏

京都平井樅仙

獵

京都橋本關雪

三等賞

血路

東京尾竹國觀

大原女

京都土田夢僊

東へ

京都小村大雲

樺太の夏

福岡水上泰生

豪華

東京尾上竹坡

かへり路

東京池田蕪園

霜月十五日

東京河崎關香

立山

京都川北霞峰

佐の江

東京磯田長秋

船出

東京伊藤紅雲

御堂關白

東京松岡映丘

松岡の春秋

東京平田松堂

農夫

京都西山翠嶂

水墨山水

東京佐竹永陵

製作の前

東京伊藤小波

春梢生芽圖
後寒村圖

京都池田桂仙

光風霽月圖

京都上田萬秋

盛夏初冬

東京山内多門

四家文射

東京高取稚成

夢

東京河合英忠

太華山實景

大阪水田竹圃

褒状

雷鳴之陣

東京小山榮達

暖い

大阪北野恆宮

三大門

東京町田曲江

霽藥の壺

東京三井萬里

白馬銀鞍

東京 山田敬中

星合ひのそら

東京 飛田周山

落雷

京都 一瀬孤螢

初夏

京都 大村廣陽

日午

京都 橋本虹影

稽古のひま

大阪 島成園

祭の日

京都 松村梅臈

信樂の郷

京都 井口華秋

深山の秋

東京 五島耕畝

焼酒と南草

東京 三浦廣洋

發願

大阪 野田九浦

葡萄

京都 山田耕雲

稻荷山の新秋

京都 徳田隣齋

簞食壺漿迎玉師

東京 島崎柳塙

深山の夏

東京 今中素友

華嚴

京都 山元春汀

豊樂

京都 玉舎春輝

朝露

東京 平福百穂

寫經の圖

東京 棚田曉山

文祿の威風

京都 岩田秀耕

つとひ

大阪 金森觀陽

幽溪積翠

東京 福田浩湖

水苑

東京 織田觀潮

雲邊淨刹

大阪 矢野橋村

出湯の宿

東京 戸室臨泉

かの子屋の娘

東京 益田玉城

山家の秋

東京 伊藤響浦

重銜

東京 檜戸觀海

村のわらべ

大阪 島御風

寧樂の春

京都 黒田芳沼

みどりの雨

東京 南保秋淵

閑汀圖

京都 庄田鶴友

朝

京都 小林春樵

西洋畫

二等賞

晚春

東京 長原孝太郎

葡萄棚

東京 南 繁造

薪

京都 太田喜三郎

冬の小川

東京 三宅 克巳

肖像

東京 中村 彝

三等賞

夢はたき

東京 大野隆徳

鏡の前

東京 森 脇 忠

入江

東京 柚木久太

紅葉の下湯

東京 牧野虎雄

磯菜摘

東京 小林萬吾

雲の影

東京 田邊 至

落葉

東京 辻 永

褒状

春深し

東京 山下 均

母と子の肖像

東京 熊岡美彦

眞菰のもと

東京 高間惣七

水の邊り

東京 小寺健吉

田舎道

東京 相馬其一

伐木の圖

東京 片多徳郎

雨のあと

東京 小糸源太郎

背戸の初秋

東京 柳澤正直

近郊から

東京 池田永治

海岸の山

東京 多々羅義雄

彫刻

第九回優賞品

二等賞

怒濤

東京 北村 西望

三等賞

イヴ

東京 北村 四海

春よ永劫なれ

東京 長谷川 榮作

髪

東京 北村 正信

褒状

はなちる音

東京 石川 確治

みづゝかひ

東京 池田 勇八

わななき

東京 國方 林三

朝霞開宿霧

東京 後藤 良

第十回審査員

委員長 武井 守正

主事 正木 直彦

日本 畫

平山 成信

竹内 栖鳳

山本 春舉

菊池 芳文

夜の深み

東京 建島 大夢

行人

東京 山倉 右一郎

若き女の胸像

東京 堀 進二

早朝の禮拜

東京 藤井 浩祐

戀

東京 川上 邦世

西洋畫

彫刻

審查員及元審查員出品

第十回審查員

寺崎廣業	高島北海	山本梅莊	小室翠雲	森鷗外	和田英作	中村不折	中川八郎	和田三造	森鷗外	新海竹太郎	山崎朝雲	北村四海
------	------	------	------	-----	------	------	------	------	-----	-------	------	------

川合玉堂	小堀鞆音	今泉雄作	荒木十畝	黑田清輝	岡田三郎助	滿谷國四郎	藤島武二	南薰造	高村光雲	白井保次郎	米原雲海	朝倉文夫
------	------	------	------	------	-------	-------	------	-----	------	-------	------	------

清麗 東京 寺崎 廣業

山二題

京都 山元 春舉

行く春 東京 川合 玉堂

富士の裾野

東京 高島 北海

天空海潤 東京 小室 翠雲

清妍

東京 荒木 十畝

港頭の夕 京都 木島 櫻谷

趙雲

東京 松本 楓湖

怒濤の月 東京 松本 楓湖

溪間

東京 吉田 博

天龍河 東京 吉田 博

山頂花崗石

東京 吉田 博

ぼたん櫻 東京 山本 森之助

雨中梨花

東京 山本 森之助

稻荷堂 東京 山本 森之助

青き光

東京 中澤 弘光

春の日の神子 東京 中澤 弘光

茶休

東京 黒田 清輝

あけちかし 東京 和田 英作

黎明

東京 中村 不折

たそがれ 東京 中村 不折

靜

東京 藤島 武二

上高地の夏 東京 中川 八郎

春

東京 中川 八郎

青島の夕 東京 中川 八郎

瓢箪鯨

東京 米原 雲海

響泉 東京 山崎 朝雲

甲種合格

東京 新海 竹太郎

M翁 東京 北村 四海

水のほとり

東京 北村 四海

龍樹 東京 新海 竹太郎

加藤先生の像

東京 朝倉 文夫

すみれ 東京 北村 四海

無鑑査出品

夕立	東京池田輝方	京十三景	京都平井楳仙
竹生島	京都川村曼舟	塞山拾得	京都橋本關雪
煉舟	京都橋本關雪	月蝕宵	京都上村松園
花野	京都菊池契月	華舫	京都小室大雲
夕月	東京池上秀畝	文姬辭胡	東京池上秀畝
山月四趣	東京田中頼璋	晴嵐	東京長原孝太郎
初夏	東京長原孝太郎	桑摘	京都太田喜二郎
夏の朝	京都太田喜二郎	山家	京都太田喜二郎
裸體	東京中村舜	田中館博士肖像	東京中村舜
夏景色	東京三宅克巳	夏の山	東京三宅克巳
午後の日	東京三宅克巳	晚鐘	東京北村西望
石工	東京北村西望	梁	東京北村西望

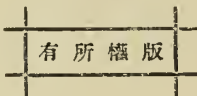
大正五年十月十七日印刷
大正五年十月廿一日發行

(定價金九拾錢)

送料
八錢

美術叢書第五編

(文展十年年)



著者 青木小四郎

東京市神田區五軒町一番地

發行者 小林壽一

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷者 倉谷鎮夫

東京市神田區五軒町一番地

發行所 美術叢書刊行會

振替東京二三一六七番

賣捌所

東京神田區表神保町 東京堂
東京京橋區元數寄屋町 北隆館
東京京橋區銀座三丁目 東海堂
京都市上京區寺町通 芸艸堂
大阪市東區平野町 柳屋書店
大阪市東區淡路町 登美屋

美術叢書既刊

(定價各冊金四十五錢)
送料金四錢

第一編

宗達と光琳

春山武松著

第二編

圓山應舉

姑射若冰著

第三編

南宗畫

青木小四郎著

第四編

池大雅

相見香雨著

美術叢書發行豫告

浮世繪の版畫

光悅と乾山

桃山時代の繪畫

浮世繪と美人

足利時代の繪畫

明治の美術

狩野派

浮世繪派

文泉と其流派

北齋と廣重

雪舟

渡邊華山

蕪村

土佐派

現代の美術

支那の美術

日本の油繪

印度の美術

吳春と景文

圓山四條派

文部大臣高田早苗先生序文

新刊 觀山畫集

上製金五圓五十錢
並製金二圓

送料内地金三十錢

下村觀山畫伯の畫集は本書を以て嚆矢とす、集むる處のものはすべて傑作のみ、畫伯が最も得意となす、老子、哲祖あり、出山釋迦虎溪三笑あり、富麗にして高雅なる、靜清圖及び城外の雨あり、宏壯細密にして然も大膽なる富岳の圖に至りては、其偉大躍如として卷帙の間に溢れんとす、其他畫伯の妙技は之を本集に收めて餘す所なし。

書册大さ 四六四倍 堅一尺三寸横九寸の大册

上製 用紙特製の厚質最良和紙絹表紙大和綴帙入

並製 用紙上質西洋紙 紙表紙大和綴 美麗製本

日本美術院
再興記念

美術展覽會出品圖錄

定價金貳圓五拾錢

送料內地金拾七錢

日本美術院
第二回

美術展覽會出品圖錄

定價金參圓

送料內地金貳拾壹錢

日本美術院
第三回

美術展覽會出品圖錄

定價金參圓

送料內地金貳拾壹錢

分冊日本畫の部 定價金壹圓五拾錢

タゴール翁將來

日本美術院編纂

最新刊

ビヂットラ
美術學校 印度畫集

定價

金壹圓參拾錢
(送料金拾貳錢)

卷頭 タゴール翁の藝術論

印度詩聖タゴール翁が將來したる、印度畫は、我國に於ては始めての展
觀にして、少からず我美術界の奇賞を博したるが現品はタ翁既に携え去
て再び之を見るに由なし、日本美術院は大に之を惜み、特に弊社に命じ
て此畫集を發行せらる、邦人の耳に馴れたる印度畫は、アジャンタの壁
畫のみにして、印度現代の繪畫は複製品の渡來少なく、本書は唯一の印
度畫集にして他に一の類書あるなし。

● 挿畫五十餘點鮮明なる玻璃版印刷 用紙最上和紙

● 書册大さ菊判 裝釘純日本式表紙印度模様木版刷

大正
博覽會

美術館出品圖錄

定價

金貳圓五拾錢

送料貳拾壹錢

現代大家新作畫集

定價

金貳圓五拾錢

送料貳拾壹錢

日本同人作品集
美術院

定價金貳拾錢

送料貳錢

第一輯ヨリ第五輯迄既刊

今上天皇陛下御眞蹟

定價金壹圓

送料八錢

日本美術院編纂

大觀畫集

定價

並製金八圓
送料金參拾錢

横山大觀畫伯の畫集は本書を以て嚆矢とす

挿畫||文展院展出品畫を初めとして代表作六十餘枚
書册大||豎一尺三寸横九寸の大册

裝釘||特製厚質良布紙表紙大和綴 上製絹表紙帙入





